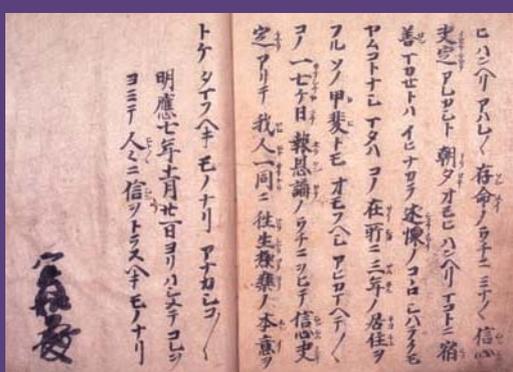
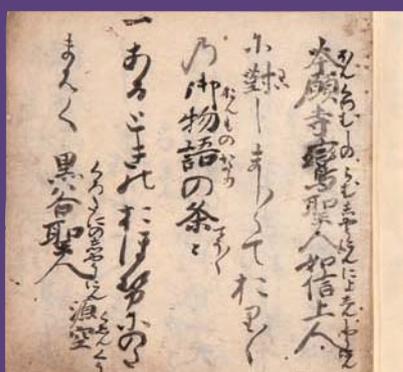


龍谷大学大宮図書館二〇一四年度特別展観
〔龍谷教学会議第五十回記念大会開催記念〕

本願寺宗主の向学

— 写字台文庫を中心にして —



特別展観の開催にあたって

龍谷大学図書館長 安藤 徹

龍谷大学図書館の蔵書は現在、二〇〇万冊を超えています。全国屈指の規模と言えます。もちろん、これだけの蔵書を一朝一夕に構築できるはずはありません。

私たちはしばしば、いま目の前にあるものごとを「そのようにあるのが当然」と思い込んでしまいます。しかし、歴史を知り、歴史に学びながら、想像力豊かな知性を養うことで、いまこのようにあることの「ありがたさ」を理解することができるはずです。「可能性の束」（丸山眞男）としての現実を見つめることができるはずです。そして、未来を切り拓く可能性を手にすることができるとは思いません。

本学の歴史は、一六三九年に本願寺境内に設置された「学寮」にはじまります。その学寮には、創設後早い段階ですでに現在の図書館に相当する機能（図書館を構成する要素）が備わっていました。つまり、三七〇年近い時間の積み重ねがあつてはじめて、いまの本学図書館があるのです。どれほど多くの先人たちが長い時間をかけ、心血をそそいで、誇るべき「知の宝庫」を作り上げてきたか。そのことにぜひ思いを馳せていただければと思います。

こうした長い歴史を有する本学図書館（大宮図書館）は、貴重な古典籍等を多数所蔵しています。その中核となるコレクションが、本願寺の歴代宗主が収集した「写字台文庫」です。同文庫の大半（約三万冊）は、第二十一代明如宗主の英断により、明治二十五（一八九二）年と同三十七（一九〇四）年の二回にわたって本学に寄贈されました。さらにその後も、第二十二代鏡如宗主による大谷探検隊が将来した資料や、第二十三代勝如宗主の基金による収集資料およびご自身の切手コレクションなどが加わり、いまにいたります。

今年度の特別展観「本願寺宗主の向学―写字台文庫を中心にして―」は、こうした歴代宗主の知と教学の一端をかいま見ることのできる貴重な機会です。龍谷大学図書館の企画としては文字どおりの「王道」で、けっして奇をてらったものではありません。「あまりに興あらむとすることは、かならずあいなきものなり」（『徒然草』）とも言います。オーソドックスなテーマだからこそ、質、量ともにたいへん充実した展示になっているものと自信しております。そして、ご覧いただければ、かならずや「知の宝庫」としての本学図書館の魅力を実感していただけるものと確信しております。

本展観は、龍谷教学会議の第五十回大会が開かれることを記念し、あわせてこのたび専如上人が本願寺第二十五代宗主として法統を継承されたことを慶祝する意も込めて、同会議との共催で開催いたします。ご協力くださいました関係各位に深く感謝申し上げます。

なお、本学図書館のホームページでは、今回展示したものも含め、多くの貴重な資料をデジタル画像として公開しています。ぜひ、そちらもご覧ください。

二〇一四年一〇月

ご挨拶

浄土真宗本願寺派の宗門が、教学の研鑽をもってその礎としてきたことは今更言うまでもありませんが、その具現化の一環として設立されたのが龍谷教学会議であります。仏教思想や浄土教研究のための学会は世に多く見られますが、宗門の教学研究を主要目的とする本学会には独自の意義があるのであって、ただ単に宗義の客観的研究にとどまるものではないのです。ところで、宗門の教学が組織的に推進されたのは寛永十六（一六三九）年に第十三代良如宗主が本願寺境内に学寮を設立し、それを統理するために准玄を能化職に任じられたことをもってその嚆矢とします。以後、宗門の教学はこの学寮を中心に発展を続け、先の大戦後二十年以上を経て、その学問的伝統を継承し、さらにその裾野を拡げるために設立されたのが龍谷教学会議であって、今回はその第五十回記念大会を迎えることになったのであります。

先に述べたように、宗門の教学研究が組織的に推進されることになったのは良如宗主による学寮設立がその出発点でした。しかし、法義の研鑽こそが第一であるとする姿勢は、良如宗主以前の本願寺歴代宗主において変わることなく維持されてきたのであって、「写字台文庫」はその伝統継承の象徴であるといえるでしょう。

そもそも「写字台文庫」とは、法義の研鑽を第一とする本願寺歴代宗主によって依用された蔵書の総称であり、現在はその書籍の大半が龍谷大学に移管されています。龍谷大学図書館に収蔵される貴重書の基礎が、この文庫によって成り立っていることからしても、その重要性がうかがえるというものです。

この度の龍谷教学会議第五十回記念大会の特別展として、「本願寺宗主の向学―写字台文庫を中心に―」の標示のもとに、同文庫の貴重な蔵書が展観されることになったのは、まことに意義深いことで、その学問的伝統を反映して設立された本学会の意図の一端がここにあらわされています。殊に本年六月には第二十四代即如宗主から第二十五代専如宗主へ法統が継承されたこともあって、その意義はひとしお深いものがあると言えましょう。今回の展観によって、少しでも本願寺宗主の向学に対する情熱を感じていただければ有り難いことでもあります。

最後に、本展開催にあたりご協力いただいた龍谷大学大宮図書館ならびに関係者の皆さまに感謝申し上げます。

平成二十六年十月

龍谷教学会議会長 徳 永 一 道

写^{しゃ}字^じ台^{だい}文^{ぶん}庫^こについて

■約三万冊の書籍群

「写字台文庫」は、本願寺第二十代宗主広如上人（一七九八～一八七二）によって名付けられた本願寺歴代宗主が収集・伝持してきた書籍の総称である。現在、その大半が龍谷大学大宮図書館に寄贈されており、その数およそ三万冊に及んでいる。収集された書籍のジャンルは幅ひろく、仏典のみならず文学・歴史・社会・自然科学など関連諸分野を含んでいる。まさに歴代宗主の向学と教養の高さをうかがうことができるきわめて貴重な資料群である。

■証如上人から始まる書籍の収集

写字台文庫中の貴重書で最も古いものは鎌倉期にさかのぼり、時代別に分類すると室町時代の仏典が多く残っている。

なかでも、蓮如上人のひ孫にあたる証如上人（一五一六～一五五四）による典籍収集は群を抜いており、外典を含む幅広い書籍の収集はこの時期から始まったと考えられる。例えば、上人の『石山本願寺日記』（天文日記）によれば、天文十八（一五四九）年正月に後奈良天皇より『三十六人家集』を拝領されるなど、公家・武家からの贈答品という形での納入が多い。また、皇室から拝領された『栄華物語』や青蓮院門跡から送られた『伊勢物語』などは、証如上人の母公である慶寿院のつながりによって施入された図書である。こうした宗主を取り巻く人脈にもとづいた書籍の収集は顕如上人（一五四三～一五九二）の時代にも引き継がれていく。写字台文庫のなかでもとりわけ重要な『源氏物語』関係の図書がその一例である。

■多様な本願寺の学問

江戸時代に入ると、『浄土文類聚鈔』の開版を行ったことで知られる第十二代宗主准如上人（一五七七～一六三〇）、さらに龍谷大学の前身となる学寮を

創建した良如上人（一六一二～一六六二）によって本願寺における学問の気運は大きく高まった。この時代には漢詩集や和歌集、儒学関係の図書などを中心に仏典以外の書籍の収集が目立っているが、それらは江戸初期の本願寺における学問の多様性を示すものといえよう。こうして証如上人から第十九代本如上人（一七七八～一八二六）に至る約三〇〇年間に、四万冊に及ぶ書籍が集められたのである。

■文庫の成立

ところで収集された図書はどのように管理されていたのであろうか。第十四代寂如上人（一六五一～一七二五）の頃に作られた目録にはすでに「西御文庫」という名称が登場しており、宝暦十（一七六〇）年に刊行された『本願寺御大絵図』にも「御ぶんこ」と称する建物が描かれている。したがって、この時期に何らかのまとまった文庫が形成されていたとみてよいであろう。

もっとも、歴代宗主の個人的な蔵書という性格が強かったためか、宗主と親しい方への貸し出しなどが繰り返されたことでたびたび書籍の紛失が生じていたという。

こうした状況を憂えて徹底的な蔵書整理を行ったのが第二十代宗主の広如上人である。安政三（一八五六）年、十年の歳月がかけられた整備が完了すると、上人自ら「写字台文庫」と揮毫した扁額を庫上に掲げ、歴代宗主の向学を顕彰されたのである。

■み教えを受け継ぐ

扁額の裏には、「写字台」という名称が唐の太宗（李世民）の書庫名に由来すること、そして大蔵経をはじめとする内外典、和漢の百書が収蔵された「巻帙浩瀚」にして「汗牛充棟」なる書庫であることが高らかに宣言されている。また、将来にわたる仏法の隆昌が強く呼びかけられている。この扁額は現在、大宮図書館写字台文庫入り口に高く掲げられ、仏法を学ぶ私たちを静かに見守っている。

目次

特別展の開催にあたって | 1

ご挨拶 | 2

写字台文庫について | 3

歴代宗主ゆかりの至宝

1 方便法身尊形 | 8

2 三帖和讃 | 9

3 口伝鈔 | 10

4 破邪顕正抄 | 11

5 黒谷上人語燈録 | 12

6 蓮如上人書状 | 13

7 御文章 | 14

歴代宗主の向学

本願寺の歴代宗主 | 16

第十代宗主 証如上人 (二五二六～一五五四) | 17

8 詞源要略 | 18

9 和歌会席 | 19

第十一代宗主 顕如上人 (二五四三～一五九二) | 20

10 論語集解 | 21

11 御成敗式目・式目義解 | 22

第十二代宗主 准如上人 (二五七七～一六三〇) | 23

12 浄土文類聚鈔 | 24

13 節用集 | 25

14 公卿補任 | 26

第十三代宗主 良如上人 (二六二二～一六六二) | 27

15 学寮造立之事 付以後法論次第(承応閼牆記) | 28

16 選択本願念仏集 | 29

17 指出一番象戯 | 30

第十四代宗主 寂如上人 (二六五一～一七二五) | 31

18 金鑑記 | 32

19 浄土和讃嘗解・高僧和讃嘗解 | 33

20 鷺森含毫 | 34

第十五代宗主 住如上人 (二六七三～一七三九) | 35

21 往生要集 | 36

第十六代宗主 湛如上人 (二七二六～一七四二) | 37

22 選択本願念仏集 | 38

23 仏説阿弥陀経 | 39

第十七代宗主 法如上人 (二七〇七～一七八九) | 40

24 大谷本願寺通記 | 41

25	真宗法要	42
	第十八代宗主 文如上人 (二七四四～二七九九)	43
26	和歌集	44
27	茶源	45
28	格致余論	46
29	格致余論講義	47
	第十九代宗主 本如上人 (二七七八～二八二六)	48
30	花鳥図・瓢之図	49

本願寺宗主と諸典籍

31	草子之目錄	52
32	西御文庫御道具入日記	53
33	御書物虫弘誌	54
34	広如上人御影	55
35	明如上人御影	56
36	重訂釐正写字台藏書目錄	57
37	写字台文庫目錄定則	58
38	写字台藏書御下附目錄	59
39	東海道細見図 西海陸細見図	60
40	読史余論	61
41	海外新話	62
42	絵本太閤記	63

43	絵本三国志	64
44	伊勢物語	65
45	四十人集	66
46	芭蕉門伝二十五ヶ条	67
47	職人尽歌合	68
48	絵本百鬼	69
49	諸儀象図	70
50	平天儀	71
51	紹興校定経史証類備急本草	72
52	舍密開宗	73
53	全体新論	74
54	婦嬰新説	75
55	解体新書	76
56	立華正道集	77
57	象戯勇士鑑	78
58	和漢名画苑	79
59	芥子園画伝	80
60	北斎漫画	81
61	勝如上人旧蔵切手コレクション	82

歴代宗主ゆかりの至宝

方便法身尊形

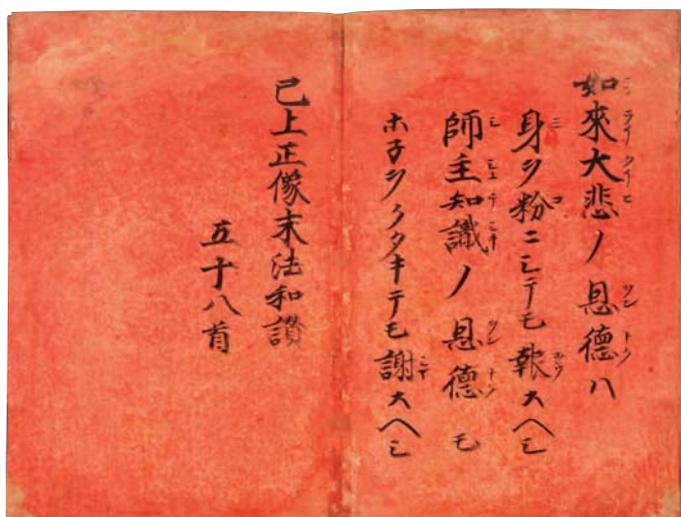
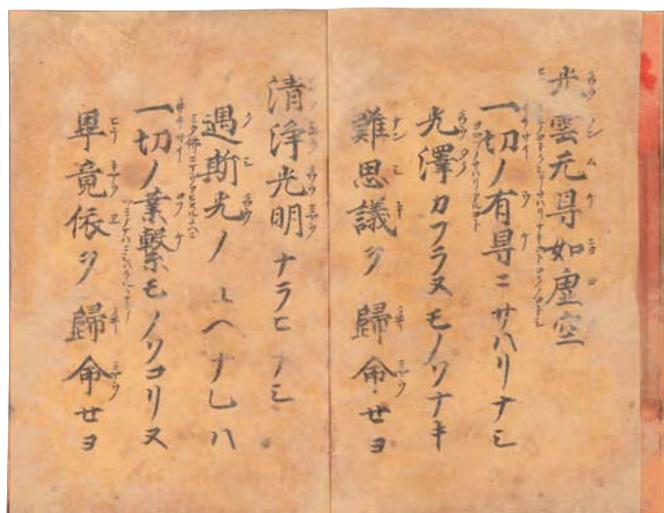
一幅 制作者不詳 南北朝時代修復 縦二二二・三×横五八・二cm
 【請求記号 0241-36-1】

都合により、会場ではパネルによる展示となります。



裏書画像

浄土真宗の本尊である方便法身尊形（衆生を救済するために具体的なかたちあるものとしてあらわれた仏身のこと）で、四十八条の光明を放っている。現在用いられている方便法身の例となるものだが、この絵像自体は鎌倉末期の特色があり、衣部分に施された截金彩色も当時のもので、この時代に四十八条の光明が描かれているのは数少ない。背裏には、蓮如上人による修復の裏書がある。そこには「奉修復方便法身尊形／大谷本願寺 釈蓮如（花押）／文明二歳「庚寅」二月十二日／和州吉野郡下淵円慶門徒／同郡十津河野長瀬鍛冶屋／道場本尊也／願主釈浄妙」とあり、文明二（一四七〇）年に釈浄妙を願主として修復し、吉野郡下淵円慶の門徒、鍛冶屋道場の本尊として蓮如上人から授与されたものであることが知られる。

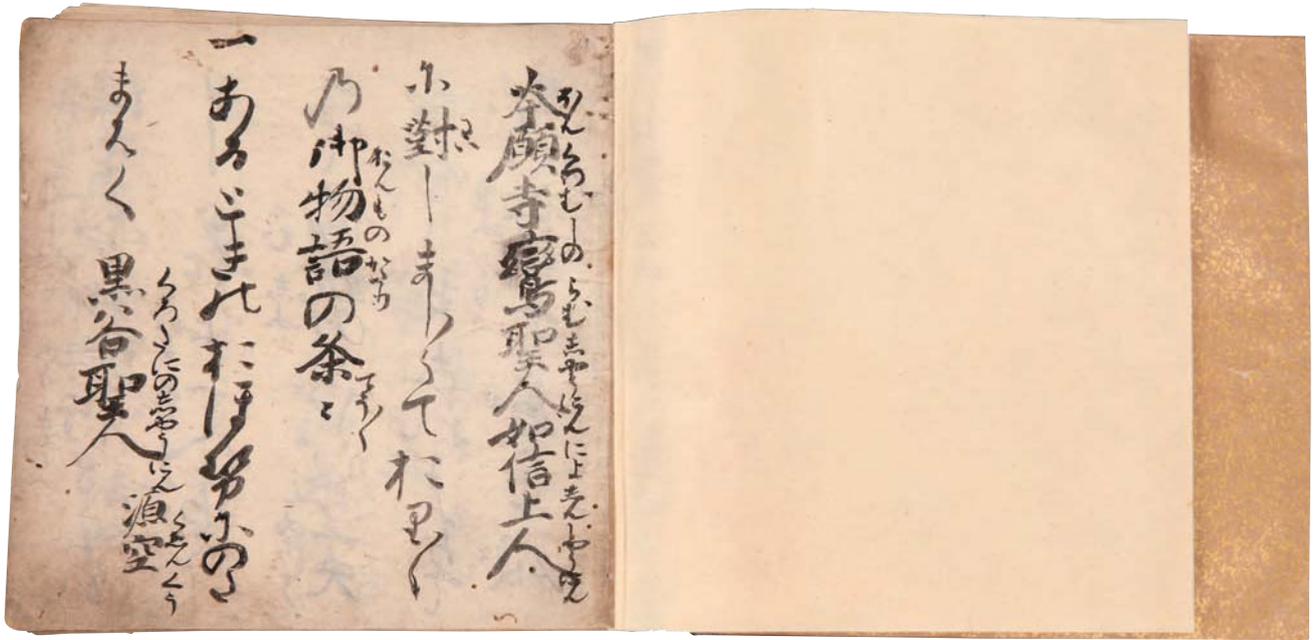


2 三帖和讃

三卷三冊 親鸞著 室町時代写 縦二一・〇×横二三・六cm
〔請求記号 021-170-3〕

三帖和讃とは、親鸞聖人が晩年に著した『浄土和讃』『浄土高僧和讃』『正像末法和讃』の総称である。『浄土三部経』や七高僧の著作などをもとにして浄土真宗の法義が述べられており、「和語の教行信証」とも称される。文明五（一四七三）年に蓮如上人が「正信偈」と合わせて出版したことにより（これを文明本という）、浄土真宗の門徒にとつてより親しみのあるものとなった。諸本によって、収録される和讃の数は相違するが、文明本には三五三首が収められている。

今回展示するものは、料紙が黄色と赤色に染め分けられていることから、「色紙和讃」とも呼ばれている。



3

口伝鈔 くでんしやう

三卷三冊 覚如著 元弘元（一一三三）年成立、康永三（一一三四）年自筆
 縦一五・七×横一六・六cm
 （請求記号 021.260.3）

本願寺第三代宗主である覚如上人（一二七〇～一三五二）の著作で、元弘元（一一三三）年に行われた親鸞聖人の御正忌報恩講での口述を、門弟の乗専が書き取ったものである。本書には、親鸞聖人から如信上人へ、そして如信上人から覚如上人へ口述された真宗の肝要が二十一箇条にわたって述べられている。法然―親鸞―如信の三代にわたって法義が伝承されたとする「三代伝持の血脈」は、本書において初めて明確にされる。また、本書には、真宗教義の中核が信心正因（信心こそが往生の正しい因であること、称名報恩（口に仏の名号をとなえることは、如来大悲の恩に報いるということ）であることが述べられている。

今回展示するものは、覚如上人の自筆本で、康永三（一一三四）年に写されたものである。ちなみに、本書には乗専が書写した一本も所蔵されている。詳しくは『龍谷大学善本叢書十一 口伝鈔・改邪鈔』（福間光超編）を参照していただきたい。

ソノチニ^ヒ 辟^ヒ 喻^ヒ 經^ヒ 唯^ヒ 元^ヒ 三^ヒ 昧^ヒ 經^ヒ 淨^ヒ 去^ヒ 三^ヒ 昧^ヒ 經^ヒ
 等^ヒ ノ コロニ^ヒ ヨリテ^ヒ 念^ヒ 佛^ヒ ノ 行^ヒ 人^ヒ ハ 菩^ヒ 薩^ヒ 聖^ヒ
 衆^ヒ ノ 護^ヒ 念^ヒ シ^ヒ ヲ フリテ^ヒ ト^ヒ シ^ヒ 人^ヒ イ^ヒ ク^ヒ チ
 シ^ヒ 轉^ヒ テ^ヒ 長^ヒ 命^ヒ 安^ヒ 樂^ヒ 花^ヒ コト^ヒ シ^ヒ ヲ ト^ヒ 擡^ヒ セリ
 ステ^ヒ ニ 長^ヒ 命^ヒ ノ 業^ヒ 目^ヒ 有^ヒ リ^ヒ ナ^ヒ ソ^ヒ 不^ヒ 去^ヒ ノ 劣^ヒ 行^ヒ
 シ^ヒ ヲ ヤ^ヒ 謗^ヒ 難^ヒ ノ^ヒ ム^ヒ チ^ヒ 言^ヒ 語^ヒ ノ^ヒ シ^ヒ ヲ フ^ヒ ト^ヒ コ^ヒ ニ

アラス

破邪見正抄上

大谷本願寺親鸞上人之御流之正理也

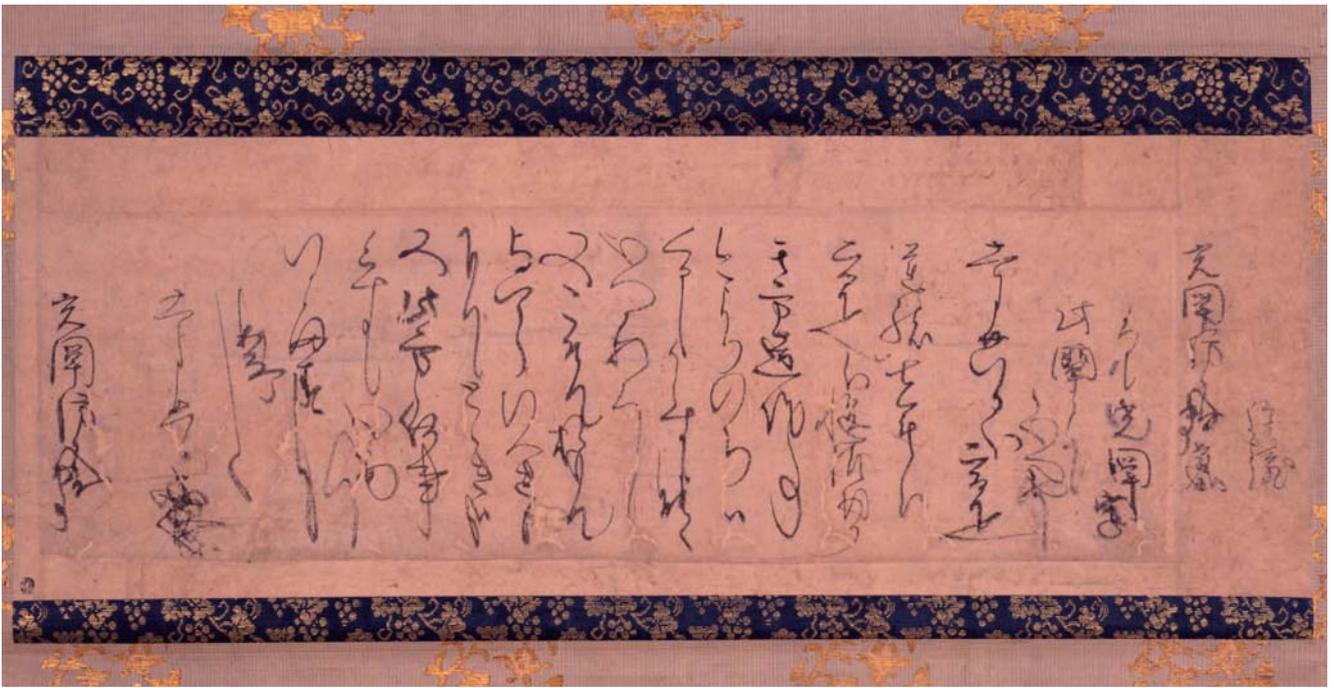
予不才者也

4 破邪顯正抄

三卷三冊 存覚著 元亨四(一三三四)年成立、室町時代書写
 縦二六・三×横一九・五cm
 (請求記号 021-206-3)

本願寺第三代宗主である覚如上人(一二七〇〜一三五二)の長男存覚上人(一二九〇〜一三七三)の著作で、元亨四(一三二四)年に了源の求めによって和字で著されたものである。念仏に対する謬見(まちがった見解)の破邪と顕正とにあたり、十七箇条について浄土真宗の立場が明らかにされている。また、冒頭の一文は念仏停止に対する訴願状の形式が取られており、存覚上人の作成した『浄典目録』にも、本書を「破邪顯正申状」と記載されている。

今回展示するものは、その上巻奥書に「大谷本願寺親鸞上人之御流之正理也／本願寺住持存如(花押)」とあることから、本願寺第七代宗主である存如上人(一三九六〜一四五七)による書写であることが知られる。上・中・下巻のすべてが揃う書写本としては、最古のものである。また、法如上人の時代に作成された『真宗法要』に収録される『破邪顯正抄』は、本書をもとに作成したとされる。詳しくは『龍谷大学普本叢書七 破邪顯正抄・顯名鈔』(普賢見壽編)を参照していただきたい。



〔釈文〕

〔包紙上書〕

〔端裏切封墨引〕

「 信証院

光闡坊御房 蓮如

御返事

尚々光闡之字

此闡にて

御心へ候へく候。

十一月廿八日分二百疋、

蓮祐七年分

二百疋分儘請取了。

其方造作事、

今よりのちハ

くるしからず候。能々

心へられ候へく候。

又こそておもて、

与四郎ひんきも

下へく候。と、き候哉。

又此方何事

候ハす候。心易く候へく候。

以面承候へく候。

あなかしく。

十一月十一日 蓮如（花押）

光闡坊御房

御返事

6

蓮如上人書状

一幅 蓮如上人筆 文明八（一四七六）年頃 縦一八・〇×横五〇・五cm
〔請求記号 0211-122-1〕

本書状は、蓮如上人（一四一五～一四九九）の自筆書状である。加賀山田（現在の石川県加賀市）の光教寺蓮誓（一四五五～一五二二）が、親鸞聖人の御正忌と、文明二（一四七〇）年十二月五日に亡くなった蓮如上人の妻である蓮祐尼（蓮誓の義母）の七回忌とを縁として懇志を送ったことに対する受納の報告とお礼を述べたもので、その内容から文明八年ごろに書かれたと考えられる。

書状のはじめに「尚々光闡之字、此闡にて。御心へ候へく候」とあるのは、「日野一流系図」に「光専坊改光闡坊」とあるように、蓮誓が光専坊から光闡坊に字を改めたのであるが、それはこの書状によるものとされる。

7 御文章

五卷五冊（内一冊のみ） 蓮如著 室町時代刊 縦二七・四×横二一・六cm
〔請求記号 021-215-1〕

抑今月報恩講ノ事例年ノ舊義トシテ
七日ノ勤行ヲイタストヨイニソノ退轉ナシ
シカルアヒタコノ時節ニアヒアタリテ諸國門葉ノ
タラヒ報恩謝徳ノ懇志ヲハ己稱名念佛ノ
本行ヲツタストコトニ己専修専念更定住生ノ
徳ナリコトヘニ諸國叅詣ノトモカラニツヒテ

一味ノ安心ニ任スル人トシテハヒトミエタリソノ
上ハ眞實ニ佛法ニコロサシハナクシテタ
人トチハカリアルハ仁義イテノ風情ナラハ
トコトモテナケカニキ次第ナリメクイハシイカト
イフニ未安心ノトモカラハ不審ノ次第ヲモ
沙汰セサルトキハ不信ノイタリトモオホエ
ハシハサレハハルノト万里ノ遠路ヲシノキ又

第八代宗主である蓮如上人が、門弟の要望に応じて書いた教化のた
めの手紙で、真宗の教えの要が平易に説き示されている。『御文』『勸章』
『宝章』なども称され、真宗門徒によって親しまれている。

第九代宗主の実如上人（一四五八～一五二五）は、教化の中心に「御
文章」を置き、その中でも特に重要なものを五帖八十通にまとめて門
末に授与した。これを「五帖本」とも「帖内本」ともいう。この「五帖本」は、
第十代証如上人（一五一六～一五五四）によって出版されて広く流布
した。また、「五帖本」からさらに撰出して一帖にまとめたものも作られ、
それらを「御加御文章」「御加御文」「単帖本」という。なお、本願寺
派では本書を「御文章」と呼ぶが、それは第十四代宗主である寂如上
人（一六五一～一七二五）が、貞享元（一六八四）年に出版した『御文章』
の奥書に、「文章」と雅称を用いたことに始まる。

今回展示するものは、実如上人の証判本（五帖本）の内、現存する
第四帖目である。通常の五帖御文章よりも各章の間隔が広く取られて
いるという特徴が見られる。

歴代宗主の向学

本願寺の歴代宗主

- ① 親鸞聖人 ————— (一一七三～一二六三)
- ② 如信上人 ————— (一二三五～一三〇〇)
- ③ 覚如上人 ————— (一二七〇～一三五二)
- ④ 善如上人 ————— (一三三三～一三八九)
- ⑤ 綽如上人 ————— (一三五〇～一三九三)

- ⑥ 巧如上人 ————— (一三七六～一四四〇)
- ⑦ 存如上人 ————— (一三九六～一四五七)
- ⑧ 蓮如上人 ————— (一四一五～一四九九)
- ⑨ 実如上人 ————— (一四五八～一五二五)
- ⑩ 証如上人 ————— (一五一六～一五五四)

- ⑪ 顕如上人 ————— (一五四三～一五九二)
- ⑫ 准如上人 ————— (一五七七～一六三〇)
- ⑬ 良如上人 ————— (一六二二～一六六二)
- ⑭ 寂如上人 ————— (一六五一～一七二五)
- ⑮ 住如上人 ————— (一六七三～一七三九)

- ⑯ 湛如上人 ————— (一七二六～一七四二)
- ⑰ 法如上人 ————— (一七〇七～一七八九)
- ⑱ 文如上人 ————— (一七四四～一七九九)
- ⑲ 本如上人 ————— (一七七八～一八二六)
- ⑳ 広如上人 ————— (一七九八～一八七二)

- ㉑ 明如上人 ————— (一八五〇～一九〇三)
- ㉒ 鏡如上人 ————— (一八七六～一九四八)
- ㉓ 勝如上人 ————— (一九一一～二〇〇二)
- ㉔ 即如上人 ————— (一九四五～)
- ㉕ 専如上人 ————— (一九七七～)

※本展観では、写字台文庫の蔵書の内、特定の宗主の蔵書として確定できる第十代証如上人以降から、「歴代宗主の向学」を構成しました。

第十代宗主

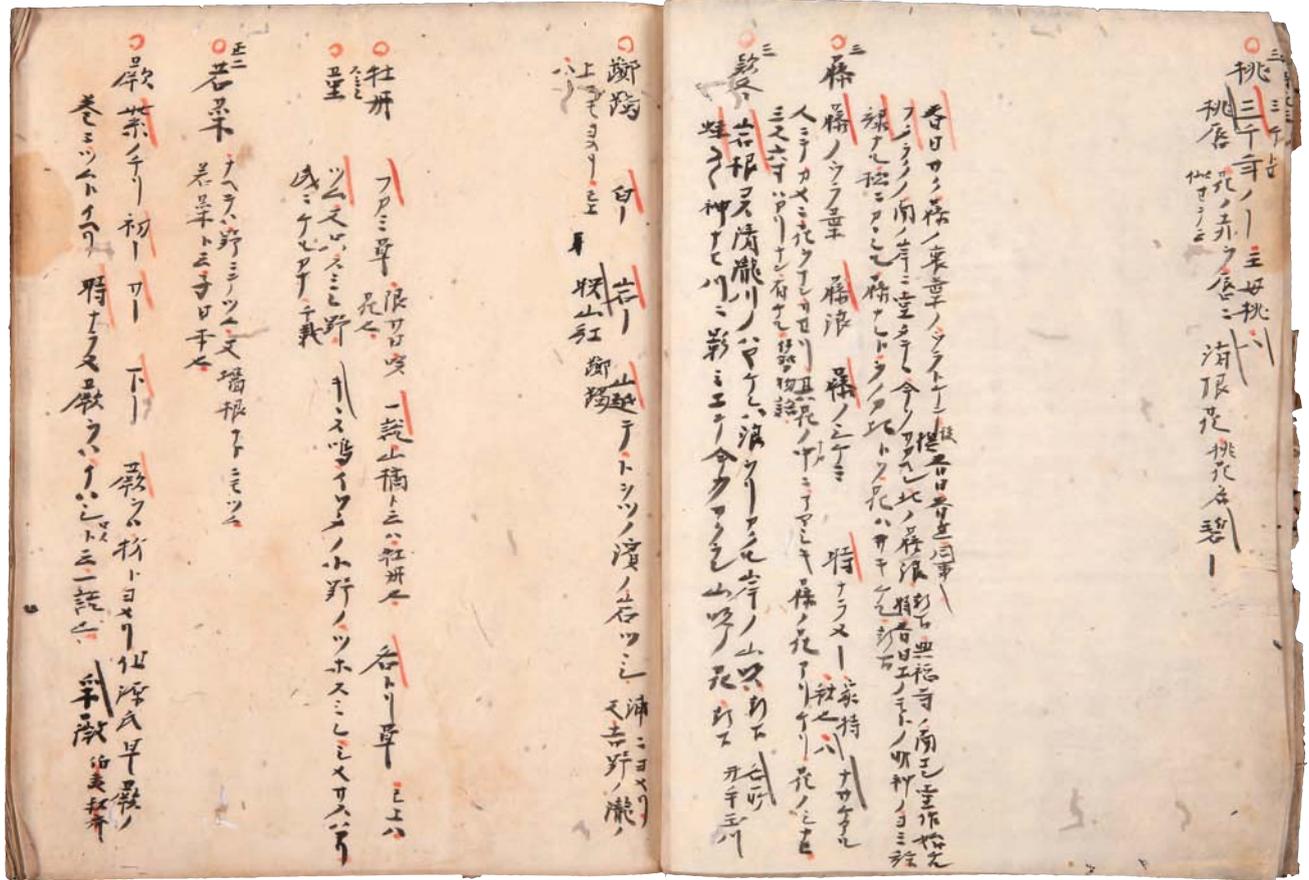
証如上人しょうにょにん
(二五六〜二五五四)

証如上人は、第九代宗主実如上人(一四五八〜一五二五)の第三子である円如上人(一四九一〜一五二二)の長男として生まれた。童名は光仙、後に光養と改め、諱は光教、院号は信受院である。九条尚経(一四六九〜一五三〇)の猶子となっており、ここから本願寺と九条家との密接な交際が始まる。証如上人以降、歴代宗主は実名に「光」の一字を入れるようになったという。

証如上人は、父の早世により、祖父実如上人の法嗣となり、大永五(一五二五)年、わずか十歳という若さで継職した。若年の上人を助けたのは、実如上人の遺言を受けた実円・蓮淳・蓮慶・顕誓などであったが、下間頼秀・頼盛兄弟などの好戦的な家臣もあって、次第に戦国武将の抗争に巻き込まれることとなった。細川晴元勢と日蓮宗徒の攻撃によって山科本願寺が焼失したために、大坂の坊舎へ寺基を移し、石山本願寺を一派の本刹とした。以後、和平の策を取って、本願寺の体制確立に努めた。また、証如上人は、平和的態度を保つためにも公家・武家・寺家に対する礼節を重視した。宮廷から『三十六人家集』が贈られたのもこの時代である。

この他、証如上人の事績として特筆すべきは、蓮如上人の『御文章』(五帖八十通)を初めて開版したことが挙げられる。なお、上人の日記である『天文日記』は、天文五(一五三六)年、上人が二十一歳の時から往生される十日前までの十九年間の記録(内二年分は欠)であり、当時の本願寺や大坂の状況などを知る上で貴重な史料となっている。



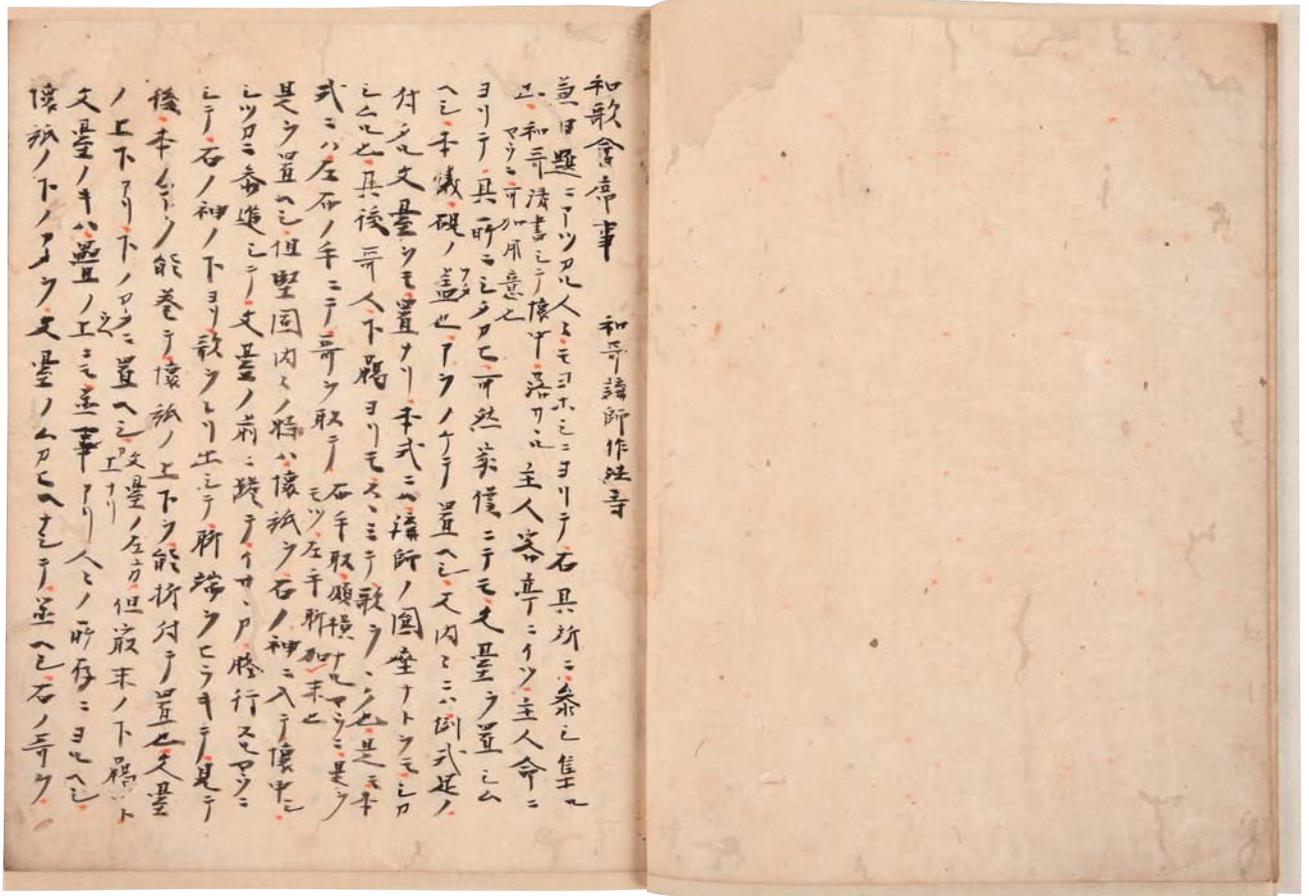


8 詞源要略

一巻一冊 清原宣賢著 室町時代後期自筆 縦二七・〇×横二一・五cm
 (請求記号 021.344.1 写字台文庫)

本願寺歴代宗主の文庫である写字台文庫には、舟橋家旧蔵の漢籍や抄物・有識故実書・歌書などが含まれており、本書はその一つである。舟橋家は明経道を家学とした清原氏の流れをくみ、江戸時代初期の秀賢(一五七五〜一六一四)の時に家名を舟橋と改称し、名儒と称される人物を輩出した。本書の著者である清原宣賢(一四七五〜一五五〇)もその一人で、儒学の大成者としても知られている。宣賢は神道家の吉田兼俱(二四三五〜一五一二)の三男として生まれ、享祿二(一五二九)年に出家して、環翠軒宗尤と号したという。証如上人(一五一六〜一五五四)とも親交があり、証如上人の日記『天文日記』の記事にその名が見える。本書が写字台文庫に収蔵された時期は不明であるが、証如上人との親交からその時代ではないかと推測される。

本書は和歌に関する清原宣賢自筆の分類体辞書であり、他に類を見ない唯一のものである。内容は和歌を作る際に使用する語を引くための辞書であり、春部・夏部・秋部・冬部・天象部・時節・草部・虫部・魚部など二十門に分類され、例歌を付す場合も見られる。それら語彙の傾向などから、『八雲御抄』(順徳天皇著)を参考にして作成されたものとされる。詳しくは『龍谷大学善本叢書二十四 詞源要略・和歌会席』(大取一馬編)を参照していただきたい。



9 **和歌会席**

一巻一冊 著者不詳 室町時代後期清原宣賢写 縦二八・二×横二二・八cm
 (請求記号 021-380.1 写字台文庫)

本書は、原表紙中央に「和歌会席 講師作法等」とあることから、和歌に関する作法書であることが知られる。内容の特徴としては、藤原定家の『和歌書様』『和歌会次第』が随所に引用されている点や、飛鳥井流の作法が記されている点、公式歌会の作法である「本式」と私的歌会の作法である「内々ノ時」との作法が記されている点などが指摘されている。

奥書によれば、本書は「鶴首尚書藤原」の亡き父による作法書で、門外不出としていたが、「或人」の所望によつて書写して与えたもので、それをさらに清原宣賢(一四七五〜一五五〇)が書写したものである。なお、「或人」に書写して与えた際、亡き父の口伝や秘事の記事を用捨しながら書写したという。

『詞源要略』の項でも述べたとおり、証如上人(一一五一〜一五五四)と清原宣賢とは親交が深かったことから、写字台文庫に收藏されたと考えられる。詳しくは『龍谷大学善本叢書二十四 詞源要略・和歌会席』(大取一馬編)を参照していただきたい。

第十一代宗主

顕如上人けんによしようにん

(一五四三～一五九二)

顕如上人は、証如上人(一五一六～一五五四)の長男で、諱を光佐、院号を信楽院という。本願寺宗主の得度は、青蓮院で行われるのが常であったが、父である証如上人が三十九歳という若さで往生をむかえたため、初めて本願寺で行われた。天文二十三(一五五四)年八月十二日のことである。その翌日、証如上人が示寂したことを受けて、顕如上人が十二歳の若さで継職した。

顕如上人の時代については、永禄二(一五五九)年に門跡の勅許を受けたことや、永禄四(一五六二)年に親鸞聖人三百回忌法要を勤修したことなどが挙げられるが、その後の織田信長(一五三四～一五八二)と十年間にわたる石山合戦がよく知られている。その原因は、信長と対立する近江の浅井、越前の朝倉、甲斐の武田、安芸の毛利などと本願寺が懇意であったために、信長から敵対視されたことにあるとされる。当初、本願寺は信長の不当な要求(五千貫の矢銭の要求)に堪えて応じたものの、石山本願寺の開け渡し要求を拒否したところ、破却するとの返事を受けてついに決起した。最終的に天正八(一五八〇)年に信長と和睦し、上人は紀伊国鷲森へ退去した。以後、和泉国貝塚、摂津国天満を経て、天正十九(一五九二)年に現在の京都六条堀川に寺基を移した。なお、天正十八(一五九〇)年には、本願寺に絵所が設置され、各寺院に授与する本尊や御影が描かれたという。



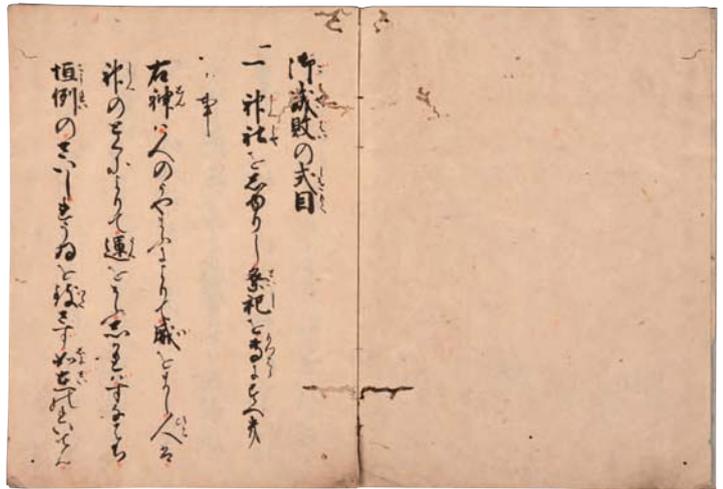
10 論語集解

十卷四冊（魏）何晏集解 正平十九（二二六四）年刊、元龜三（一五七二）年加點 縦二六・五×横二〇・八cm
 （請求記号 021.94 写字台文庫）

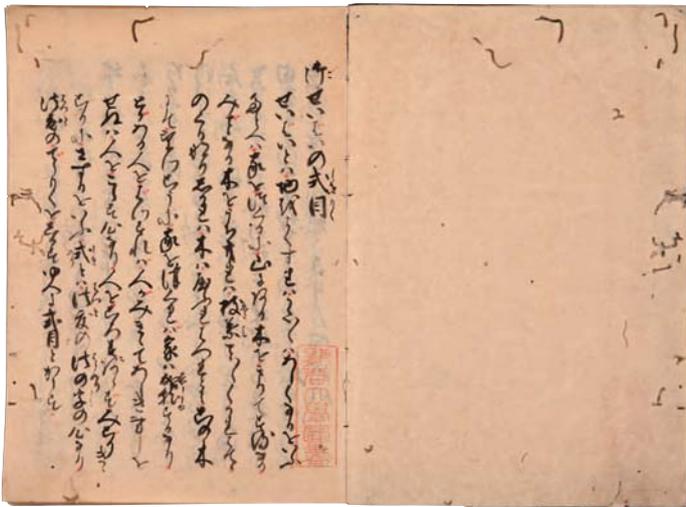
中国の何晏（生年不明〜二四九）による『論語』の注釈書で、十卷で構成される。完全な『論語』の注釈書としては現存最古のものである。朱熹（一一三〇〜一二〇〇）の註釈を新注と呼ぶのに対して古注と呼ばれ、朱熹以前の解釈を知るための最善の書とされる。漢から魏までの八家の説を集めて、自らの解釈を加えている。日本では古くから書写されており、正平十九（一三六四）年の刊本が現存最古のものである。

今回展示するものは、正平版とされる無刊記本で、奥書に「応下間筑後法橋威命拭洪眼／染秃筆以累家秘本加朱墨点勿／令外見而已／元龜第三歳舍壬申孟秋二十又八／宮内卿清原朝臣（花押・印）」とあることから、下間筑後法橋（一五一六〜一五七五）の依頼によって、元龜三（一五七二）年に儒者の清原枝賢（一五二〇〜一五九〇）が累家の秘本によって朱点・返り点・右仮名・合符などを付したものであることが知られる。清原枝賢による加點本は、他に例を見ない唯一のものとされる。清原枝賢は、証如上人時代に親交の深かった清原宣賢（一四七五〜一五五〇）の孫で、キリシタンの清原マリアの父に当たる人物である。儒学の講義を行う明経博士をつとめ、天正九（一五八一）年には出家したといふ（法名道白）。

言任諸侯可，仲弓問子乘伯子王
 使治國也
 日伯子書子日可也簡必其能簡
 傳無見焉故日可也
 仲弓日居敬而行簡必臨其民不
 亦可乎孔安國日居身敬肅居簡
 臨下寬畧則可也
 而行簡無乃太簡乎苞氏日伯子之簡太簡也
 子日雍之言然哀公問日弟子孰
 為好學孔子對日有顏回者好學
 不遷怒不貳過不幸短命死矣今
 也則亡未聞好學者也凡人任情
 顏淵任道怒不過分遷者移也怒
 當其理不移易也不貳過者有不
 善沫膏復行也子華使於齊冉子為其母
 請粟子日與之釜馬融日子華弟
子公西華赤字



『御成敗式目』



『式目義解』

11 御成敗式目・式目義解

各一巻一冊 戦国時代写 縦二三・三×横一六・八cm (御成敗式目)

縦二五・一×横一六・九cm (式目義解)

(請求記号 021-3652 写字台文庫)

『御成敗式目』は、貞永元(一二三二)年に制定された、五十一箇条からなる鎌倉幕府の根本法典である。年号から「貞永式目」とも呼ばれる。時の執権であった北条泰時(一一八三～一二四二)が評定衆の三善康連(一一九三～一二五六)などに編纂を命じたもので、御家人の権利や義務、訴訟での判決の基準になるものなどについて成文化されている。本書は広く社会に流布し、室町幕府や戦国大名の家法にも大きな影響を与え、武家法の基本となった。江戸時代には、武家の考えを要約したものとして、幼少向けの教科書にも用いられたという。『式目義解』は、『御成敗式目』の解説書である。

今回展示するものは、二書ともに清原枝賢(一五二〇～一五九〇)の奥書を有するものである。清原家には『御成敗式目』に関する相伝があり、その解釈は権威を持っていたというから、その点でも本資料の存在意義は大きい。また、これら二書はともに顕如上人の妻如春尼(一五四四～一五九八)の求めに応じて書かれたものと指摘されている。如春尼は、本書の他にも『源氏物語』の相伝を二度受けた人物ともされており、顕如上人と同じくその向学意識は注目される。

第十二代宗主

准如上人じゆんによしやうにん
(一五七七〜一六三〇)

准如上人は、顯如上人の第三子で、童名は阿茶、諱を光昭、院号は信光院（理光院ともいう）である。当初は本行寺に住していたが、文禄二（一五九三）年に、豊臣秀吉（一五三七〜一五九八）の裁断によって教如上人（一五五八〜一六一四）に代わり宗主となった。この時代は、教如上人の大谷派本願寺別立という重大事や、江戸幕府樹立直後の時代の激変など、本願寺にとって重要な転機であった。そうした中、時代の大勢を見誤らず、近世本願寺教団の基盤を築いたのが准如上人であった。

上人の業績には、津村別院、浜町別院（現在の築地本願寺）などの設立による地方教化の強化が挙げられる。また、慶長元（一五九六）年の大地震や元和三（一六一七）年の大火事によって被害を受けた諸堂の復興にも尽力し、白書院など本願寺に現存する貴重な建造物を遺した。また、大谷本願寺が現在の場所に移ったのも准如上人の時代である。この他、聖徳太子・七高僧の絵像を各寺院に授与する制度や、正月の祖像献盃の式、御堂における奏楽など、新たな制度の確立にも取り組んだ。准如上人の向学として特筆すべきは、慶長七（一六〇二）年の『浄土文類聚鈔』開版である。本書は当時の最新技術であった活版印刷技術を用いて出版されている（古活字版）。また、今回展示する易林本『節用集』など、古活字版の典籍が多く写字台文庫に収蔵されている。この他、仏教以外の典籍にも精通しており、当時本願寺にいた山科言経（一五四三〜一六一二）とも親しく、奏楽・能・和歌・連歌などを嗜み、慶長十七（一六一二）年の盆踊りには、上人自ら踊りに加わったと記録される。また、上人自身が筆を執った日記の抜き書きとされるもの（例えば『慶長三年ヨリ同年マデ日記』〔龍谷大学大宮図書館蔵、〇二二／二六九／一〕）も伝わっている。



論說師釋共用心 拯濟无邊慈獨惡
 道俗時聚符卷共 准可信斯高僧說
 六十行一百二十句偈頌已畢
 問念佛往生願已發三心論王何以故言一
 心答愚健眾生覺知為念易故論主合三為
 一教言三心者一者至心二者信樂三者發
 生私以字訓闡論意合三應一其意何者
 者至心至者真誠心者信樂信者
 真實誠滿極成用重審驗樂者欲願慶喜樂
 三者欲生發者願樂覺知生者成與也念者
 至心即是誠種真實之心故凡有疑心信樂
 即是真實誠滿之心極成用重之心欲願發

右斯文類聚鈔者為末代興
 慶長七年秋月日

12 浄土文類聚鈔

一巻一冊 親鸞著 慶長七（一六〇二）年刊 縦二六・一×横一八・九cm
 【請求記号 021-178-1】

本書は親鸞聖人の著述で、主著『教行信証』に対して、「略文類」「略典」などとも称される。著述年代については明らかでなく、『教行信証』との前後関係について議論がある。『教行信証』と同様に浄土真宗の要義が著されており、浄土真宗の教義を知る上で重要である。

今回展示するものは、本願寺第十二代宗主である准如上人が慶長七（一六〇二）年に開版したもので、浄土真宗における漢語聖教出版の嚆矢である。当時の最新技術である活版印刷技術（古活字版）により刊行されており、准如上人の向学が感じられる。また、准如上人開版本には、准如上人の花押を持つものと持たないものがあるが、今回展示するものは花押のあるものである。墨書による右左仮名・返点・合符や、朱書による左仮名・合点・異本情報などの書き込みが見られ、もともとは白文の状態で出版されたことが知られる。

第十三代宗主

良如上人（一六三〇—一六六二）

良如上人は准如上人の第七子で、童名は茶々丸、諱を光円、院号は教興院という。寛永七（一六三〇）年に准如上人が往生を遂げたことにより、十九歳の若さで継職した。

良如上人の業績としては、准如上人の時代からの懸案であった御影堂の再建、大谷本廟の改修、寛文元（一六六一）年の親鸞聖人四百回忌法要の勤修などが挙げられる。また、本願寺の御絵伝を八幅絵伝としたのもこの時代であった。さらに特筆すべきは、寛永十六（一六三九）年の学寮の創設である。これには、准如上人の学問への関心と江戸幕府の学問奨励の機運とが大きく影響しているが、何よりも良如上人の学問に対する情熱が大きな原動力となった（平田厚志編『浄土真宗異義相論』〔龍谷大学仏教文化研究叢書〕巻二〇）所収「口上記」参照）。ここにいわゆる江戸宗学の歴史が始まるのである。

この他、良如上人の向学は、琴・謡・能・狂言・歌舞伎・茶道にまでおよび、案については四辻家から伝授を受けるなどしている。また、良如上人は早くより将棋を好んだようで、今回展示する『指出一番象戯』（元禄十一（一六九八）年刊）には、良如上人と檜垣是安（生没年不詳）との対局の棋譜が掲載されている。なお、良如上人は、慶安四（一六五二）年から万治二（一六五九）年の間の日常の出来事を石川弥右衛門に記録させており、『石川日記』として遺されている（籠谷真智子編『本願寺史料集成』巻二所収）。



二卷二册(下卷欠) 法然著 江戸時代前期刊 縦二七・五×横一九・三cm

(講求記号 021-263-1 写文字(白文庫))

法然聖人の主著で、『選択集』とも略称される。九条兼実(一一四九～一二〇七)の求めによって、建久九(一一九八)年に著述され、阿弥陀仏の本願に基づいて、称名一行(口に仏の名号を称することを専らとする行)による救済を主張し、浄土宗の独立を宣言した書物である。十六章にわたって、念仏こそが阿弥陀仏の本願に誓われた行業である旨が述べられている。本書の書写は門弟の中でもごく限られた人物にのみ許されておき、親鸞聖人もその一人に数えられる。

今回展示するものは、元和・寛永ごろの刊本とされるが、二巻のうち下巻を欠いているために刊記は不明である。表紙に「選択集 本」との題簽(だいせん)があり、冒頭にある標拳の文が「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為先」とあることから、浄土宗系の人物による出版であるとされる。また、表紙の右上に「明曆」と墨書されていることから、良如上人当時に入蔵したと考えられる。

1884
 19
選擇本願念佛集

南無阿弥陀佛

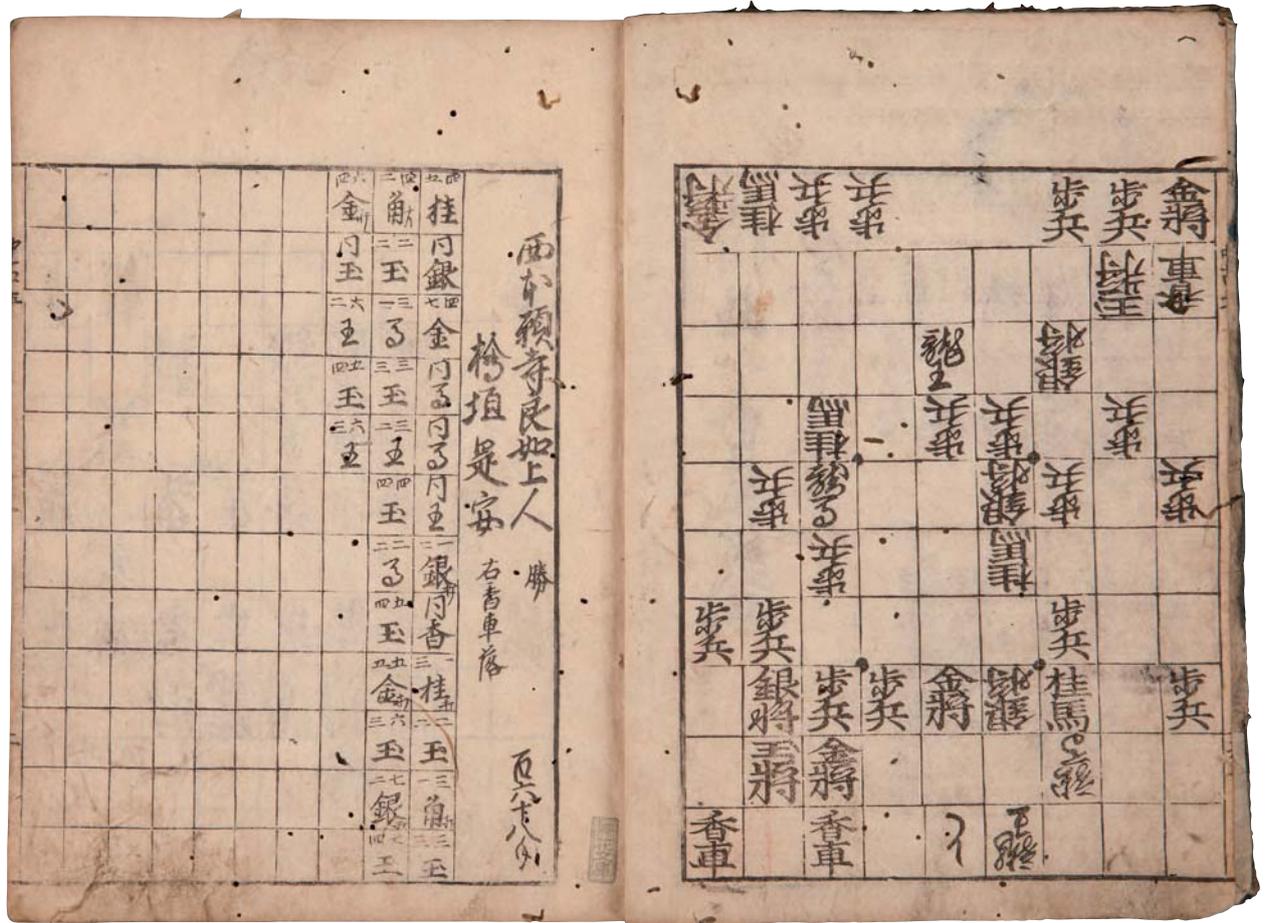
往生之業
 念佛為先

道綽禪師立聖道淨土二門而捨聖道正

歸淨土之文

安樂集上云問曰一切衆生皆有佛性遠劫以來應值多佛何因至今仍自輪迴生死不出火宅答曰依大乘聖教良由不得二種勝法以排生死是以不出火宅何者為二一謂





17 指出一番象戯

五卷（内二卷存） 編者不詳 元禄十一（一六九八）年刊

縦二・七×横一五・二五

（請求記号 024.3.1089.2 秀氏文庫）

将棋に関する書物は、寛永十三（一六三六）年刊行の『小象戯』、明暦三（一六五七）年刊行の『将棋教』、天保九（一八三八）年刊行の『将棋図解』など、江戸時代を通じて多く出版された。当時の将棋の人気ぶりがうかがえる。

今回展示するものは、元禄十一（一六九八）年に出版された古棋書で、本学図書館は巻二と巻五を所蔵している。本書には、本願寺十三代宗主である良如上人の棋譜が掲載されており、上人が将棋を好んでいたことが知られる貴重なものである。上人の棋譜は、巻五の冒頭に掲載されており、対戦相手は檜垣是安（生没年不詳）である。檜垣是安は、雁木囲いの創設者とされる人物で、伊藤宗看（一六一八～一六九四）との一局は「是安吐血の戦い」としてよく知られている。

第十四代宗主

寂如上人（二六五～一七二五）

寂如上人は良如上人の第二子で、童名を房麿、諱を光常、院号を信解院という。寛文一（二六六一）年に良如上人が往生を遂げたことから十二歳の若さで継職した。歴代の中で最長となる六十三年の間、宗主として活躍し、親鸞聖人の大遠忌法要も二度（四百回忌と四百五十回忌）勤修している。寂如上人は、勤式についてさまざまな改革を行った宗主として知られており、それらは現在にまで継承されているものが多い。例えば、本願寺両堂の間に半鐘を掛けて法要開始の合図とすることや、御影堂の両余間に九字・十字名号を掛けること、念仏の曲節の一つである坂東節を止めて八句念仏とすること、御堂衆宗謙に魚山流の声明を学ばせて声明を魚山流に改めたこと、大谷本廟の本堂に「龍谷山」の額を掲げたことなどである。また、「大師影供作法」の画讃の文は、寂如上人が親鸞聖人の影像に書いたものが用いられている。その他、寛文八（二六六八）年には『正信偈和讃』『御文章』を刊版し、特に『御文章』については、当時、各種の抜粹本が不統一に使用されていたが、それを本願寺より新規刊版されたものと申替し、統一を図っている。

また、自らも聖教の研鑽に励み、貞享三（一六八六）年には御堂衆に対して『教行信証』の講義を行う等、学問へも強い関心を持っていた。元禄五（一六九二）年には、江戸城において將軍徳川綱吉（一六四六～一七〇九）から『大学綱領章』の講義も聞いている。また、能書家としても知られており、近世本願寺宗主の中でも、第十七代宗主である法如上人（一七〇七～一七八九）と双壁と讃えられる。元禄八（一六九五）年には、前代良如上人の時代に起きた教義の論争である承応の鬨（とぎ）によって破却された学寮を、学林として復興させている。その他、この時代には正統な宗義と異なる見解である異義・異安心が摘発されることが少なくなかった。また、寂如上人の時代から、学僧の直筆による著作が本願寺あるいは写字台文庫に見られるようになる。



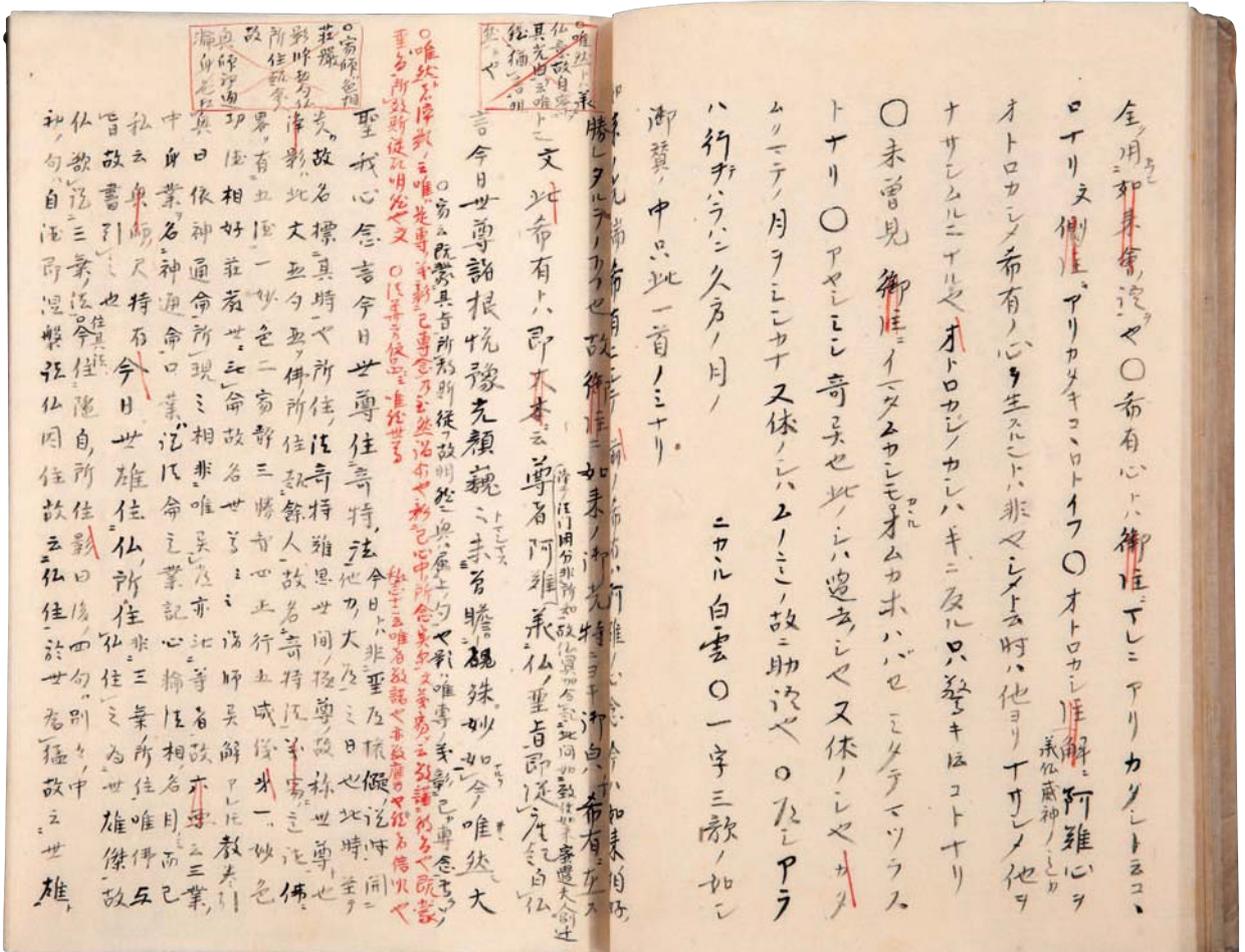
トリアス仰ラレ其ノ時仰ラレハ本子ヲ家督トシタル
 先例アルヤト問ヘハ関山以来惣領ニカキラス廢子
 ヲラス其ノ子ノ覺悟ヲ見テ兄才男女ノ(タテナク
 讓狀カキオカレシヲ家督トアカムル旨ヲ明カニ玉ヘハ
 大閤キ、玉ヒサモアルヘシ其ノ段我無案内ニシテ去
 冬肥前陣所^{朱柳ヲ送ルテリ}關白^{カキカ}寺ハ
 天子ノ勅願所^{關白}ハ関白ヨリ天子ヘ奏問申サセテ
 勅定ノ趣キニ任スヘシカヤウノ義ハカリソメニハキハメ
 カタシ大坂ニテ心静ニ聞^ニ廟ケント仰ラレ其後大坂
 へ御飯城アリテコノ出入ノ趣キヲ奏問アリケレハ
 イカヤウニ毛宜ク取扱フヘシトノ勅定ナリヌナハチ御
 兄才ヲ呼モヒ實否ヲ穿鑿シテ教如ハ日頃ノ
 才覺ハコノタヒノ為ソトタノモシク思ヒ万ガモ為
 損シハアラント思入ラレサテ理門主ヘ尋テハ先師
 ノ讓狀タシカアリヤトアレハ讓狀取持イタシ候上テ
 御関山以来代々ノ御讓狀并教如ノ不孝不義
 故ニ先任ノ家督讓サキ段勸當託言ノ誓詞ノ
 次第仰上ラレサテ效如ヘ仰ラレハ理門ノ方ヘ讓
 狀アルヤト急度相尋處ニ悵ニ有由シ申サル是テ
 先門ノ筆跡マキレアルヘカラス其ノ方ヘモ一覽セシ

18 金鑰記 こんちゆうき

二卷二冊 知空著 寛文六(一六六六)年著 宝永二(一七〇五)年朱点
 縦二六・二×横一八・七cm
 (請求記号 0222662)

江戸時代初期、本願寺は東西の二派に分かれたが、その後、表方(現在の本願寺派)と裏方(現在の大谷派)のどちらが正統であるのかについて論争が起こった。現在ではそのような論争はほとんど見られな
 いが、当時としては死活問題であったようで、寛永十五(一六三八)年
 には本願寺派の甫顔が『表裏問答』を出版して自派の正統性を主張し、
 それに対して大谷派が『翻迷集』(著者未詳)を著すなど、熾烈な争い
 が展開された。

本書は当時の碩学であった知空(一六三四―一七一八、後に第二代
 能化(本願寺派の宗学を統括する職)が本願寺派の正統性を主張したもので
 ある。今回は知空の直筆とされるものを展示した。寛文六(一六六六)
 年に著され、宝永二(一七〇五)年に知空が朱を入れたことが、奥書
 に記されている。巻頭に「本願寺」の印が刻されていることから、本
 願寺に収蔵されていたものであることが知られる。知空は寂如上人か
 ら『選択集』を伝授されるなど、信頼された学匠であった。なお、本
 書を含めた、東西両本願寺の正統性に関する論争については、『真宗全
 書』巻五十六に資料が翻刻されているので参照していただきたい。



19 浄土和讃賞解・高僧和讃賞解

十八卷十冊（浄土）・十二卷十冊（高僧） 月笠著、泰嚴写
寛延三（一七五〇）年写 縦二三・六×横一六・八cm（浄土）
縦二三・四×横一六・八cm（高僧）
〔請求記号 022-31-10（浄土）、022-30-10（高僧） 写字台文庫〕

本書は知空門下の英匠である月笠（一六七一〜一七二九）の著作である。月笠は三十歳で『起信論』などを講じ、四十三歳で『正信偈勸説』を著した。その後、住職を辞して研鑽に励み、蓮華蔵閣において華蔵会を開いて門下を育成した。その間、『真宗関節』『浄土和讃賞解』『高僧和讃賞解』『称讚浄土経駕説』などを著した。寂如上人時代の教学隆盛期を支えた人物である。その教学には、華嚴教学を応用するという特徴が見られる。また、『真宗関節』は論題研究の嚆矢であり、空華学派の数々成仏説・遍滿仏性説の萌芽や、豊前学派への影響が指摘されている。末尾にある真宗篤信者の記事は、後の『妙好人伝』にも引き継がれている。なお、『称讚浄土経駕説』は異訳小経の最古の註釈書として重要である。

今回展示するものは、『浄土和讃賞解』の末尾に「右／華蔵閣尊宿所著賞解第九卷至第十八卷謹／転写知秀子所蔵之本了／寛延三年歲舍庚午初冬三日／大谷末徒「憲榮」泰嚴」とあることから、月笠門下の泰嚴（一七一〜一七六三）が、寛延三（一七五〇）年に同じく月笠門下の知秀の蔵書を転写したものであることが知られる。また、筆致が同じであることから、『高僧和讃賞解』も泰嚴による書写と考えられる。泰嚴は第五代能化義教（一六九四〜一七六八）に見出されて学林（学問を修める本願寺の寮舎）で活躍し、『真宗法要』の編纂などに関わった人物である。妙好人和の清九郎との親交もよく知られている。

ス、ムル也。名ハ秘夏ノ最初ノ起ヲ各付也。之願寺系
以自分ノ門徒ノ義ナル故ニ能々存知テ知空ハ具ニ物語候ヲ
各付也。江戸上野東睿山ノ東ノ麓ニ涅槃寺ト云。秘夏ノ本寺
アリ。富流ノ学者能々コレヲ覚候テ破却スヘキモノナリ

鷺森含毫

史以レハ真知思ノ中ニハ一塵モナケレハ是朕を跡ナリ生滅門ノ前
ニハ方法ヲツラ子テ有相差別ナリ迷トキハ六趣森林列シ悟トキハ一
時ニ消殞スサトルヲ仏界トナツケ。迷ヲ卑生トナツク。迷解ト解送トキ
ノ及復スルカ知シ昔世ニ西化ヲヤクシテ大宅ニハセイリ。応ニ病ヲ去テ
諸法ヲ説キテ遂ニ万杆ヲモラサス。悟ノ義ハイレシメテエフコノ效ハヨ
リテ修行スル片ハ轉迷開悟セスト云一ナシソノ修行ニ付テ自
カラモツテ修スルモアリ。他カニ業ニテカナフモアリ。自カハ難行
也。他カハ易行也。跋山風水舟陸天測也。時来代ニクナリ。持
下根ノヒトモ自カハケテシ難行ヲ修セト欲セハ陸ニ舟ヲ浮

一卷一冊 知空著 江戸時代前期成立、明和三（一七六六）年写

縦一四・〇×横一七・〇五

〔請求記号〕 T79.9.22W)

本書は寛文年間に紀伊国黒江村（和歌山県）で起きた異義事件に関するものである。その経緯は以下のとおりである。黒江坊舎において、在家の作太夫が異義を唱えて僧侶貞岩と論争となった。本願寺は、それに対処して光瀬寺乘願・明覚寺存空を派遣して作太夫を教諭したが、再び論争が起こり、改めて存空が派遣されて作太夫と貞岩とを追放処分とした。しかし、貞岩に従う門徒がその処分を不当として本願寺に訴えた。本願寺は存空の教諭に誤りがあったとし、光隆寺知空などに存空を教諭させた。最終的には、寛文四（一六六四）年に乘願・知空が派遣され、貞岩を元のように入寺させ、邪義の徒を改めて回心させ騒動は終結したという。作太夫の異義内容は善知識だのみの一種であり、生身の如来である親鸞聖人や善知識への御恩を思うことが「たのむ」であり、阿弥陀仏をたのむ必要はないという主張であった。

今回展示するものは、正徳三（一七一三）年に俊諦（一六六四〜一七二一、知空門下）が写したものを、享保二十（一七三五）年に慧鑑（一六九四〜一七五一、功存の師）が写し、さらに明和三（一七六六）年に梅蓼（伝未詳）が書写したものである。こうした写伝の系譜は、本書の中に登場する知空や俊諦・慧鑑が三業婦命説（衆生が救われるためには、身口・意の三業に婦命の心をあらわして、仏に向かつて助けたまえと願い求めなければならないとする説）の萌芽とされる人物であることから、本願寺派の宗義に関する論争である三業惑乱研究においても重視される。特に、本書の中で知空が口称だのみを許容している点は、三業婦命説の淵源として常に指摘される。本書の対論図を見ると、寂如上人の前に聖教が置かれて存空と知空との対論が行われており、継職直後の寂如上人の御前にての対論であったことが知られる。

第十五代宗主

住如上人（じゅうじょうにん） （一六七三〜一七三九）

住如上人は九条兼晴（一六四一〜一六七七）の第三子で、三歳のころから本願寺で育てられ、十四歳の時に寂如上人の継嗣となつて、寂如上人の十六子（七女）常君を妻に迎えた。童名は保君、諱を光澄、院号を信順院という。元禄三（一六九〇）年からは寂如上人に代わつて免物御影の裏書をするなど、新門主として宗主を補佐した。その後、享保十（一七二五）年に寂如上人が往生を遂げたことにより五十三歳で継職した。しかし、住如上人が寂如上人の直接の子ではなかったことから、不満を抱くものがあつた。これに対して上人は、寂如上人の第十八子である直丸（後の湛如上人）を法嗣と定めて問題解決を図つた。上人の在職期間は十五年ほどと短い、在職中、福井御坊・堺御坊・伏見御坊・津村御坊を再建し、さらに北山の養源寺の本堂を移して山科御坊を造営するなど、各地別院の整備に尽力した。將軍徳川綱吉（一六四六〜一七〇九）の妻は九条兼晴の妹で、住如上人の叔母に当たる。上人は皇室や將軍家とも親密な関係にあつたという。





往生要集卷上

盡第四門半

天台宗撰嚴院沙門源信撰



夫往生熱樂之教行濁世末代之目足也道
俗貴賤誰不歸者但顯密教法其文非一事
理業因其行惟多利智精進之人未為難如
予頑魯之者豈敢矣是故依念佛一門聊集

21 往生要集

三卷六冊 源信著 室町末期刊 縦二四・八×横一五・六cm
〔請求記号 021-146-6 写字台文庫〕

恵心僧都源信（九四二～一〇一七）が四十四歳の時（九八五年）に、さまざまな経論釈から往生極楽に関する文章を集めて著したものである。日本で初となる本格的な往生極楽に関する書物であり、著述直後から広く流布して、思想・文学・芸術などの広範囲にわたって大きな影響を与えた。永延二（九八八）年には、宋の天台山国清寺に送られて高い評価を受けたという。本書には地獄の様相が克明に描き出されており、日本人にとつての地獄観の原点ともなったと言われる。

今回展示するものは、住如上人の諱である「光澄」が捺印されているものである。住如上人時代の学林は、第三代能化若霖（一六七五～一七三五）・第四代能化法霖（一六九三～一七四一）などの時代であり、写字台文庫の蔵書も拡充されたと思われるが、詳細は不明である。

第十六代宗主

湛如上人 (一七二六～一七四二)

湛如上人は寂如上人の第十八子で、童名を直丸、諱を光啓、院号を信暁院という。享保十一年（一七二六）年に嗣法となり、享保十九（一七三四）年には住如上人とともに江戸を巡化したという。その後、元文四（一七三九）年に住如上人が往生を遂げたことよって、二十四歳で継職した。しかし、生来の病身であったため、寺務は坊官たちに委ねられ、先代の住如上人の時代からの内紛も重なり、本願寺内は動揺していたという。この状況を憂いた当時の能化法霖（一六九三～一七四二）は、湛如上人の命により本山役員を古敷奇屋に集め、法話して教諭したという。この時の法話は『日溪古敷奇屋法語』として現存している（『真宗全書』巻六十二所収）。

また、文墨に巧みであつて「飛雲閣記」を著し、飛雲閣は豊臣の構築したもので、初め聚楽第にあつたが本願寺に移し、壮麗は旧に倍して前に清池を開いて小山を築いたことなどを綴っている。次代の法如上人も明和七（一七七〇）年にこれを書写した。本願寺の正史によれば、寛保元（一七四一）年六月六日、大谷本廟より戻った後に急患で倒れ、あくる七日に二十六歳の短い生涯を終えたという。宗主としての在職はわずか二年である。



法然上人の著書「選擇集」とも略称される。九条兼実（一一四九～一二〇七）の求めによって、建久九（一一九八）年に著述され、阿彌陀仏の本願に基づいて、称名一行による救済を主張し、浄土宗の独立を宣言した書物である。十六章にわたって、念仏こそが阿彌陀仏の本願に誓われた行業である旨が述べられている。本書の書写は門弟の中でもごく限られた人物にのみ許されており、親鸞聖人もその一人に数えられる。

選擇本願念佛集

南無阿彌陀佛

往生之業
念佛為本

念作念と云ふ又念作念と云ふ如是

道綽禪師立聖道淨土二門而捨聖道正

歸淨土之文

安樂集上云問曰一切衆生皆有佛性遠劫以來應值多佛何因至今仍自輪迴生死不出火宅答曰依大乘聖教良由不得二種勝法以排生死是以不出火宅何者為二一謂

22 選擇本願念佛集

二卷二冊 法然著 江戸時代中期朱点 縦二六・三×横一八・六cm
〔講求記号 022-8-2 写字(白文庫)〕

法然聖人の主著で、「選擇集」とも略称される。九条兼実（一一四九～一二〇七）の求めによって、建久九（一一九八）年に著述され、阿彌陀仏の本願に基づいて、称名一行による救済を主張し、浄土宗の独立を宣言した書物である。十六章にわたって、念仏こそが阿彌陀仏の本願に誓われた行業である旨が述べられている。本書の書写は門弟の中でもごく限られた人物にのみ許されており、親鸞聖人もその一人に数えられる。

今回展示するものは、上下巻末尾に「湛如」と朱書されていることから、湛如上人が所持したものであることが知られ、上巻の末尾の「湛如」の下に「文如繼之」（一部塗抹）とあることから、文如上人が相承したことがわかる。本文には、もともとの刊本にある右仮名や返点を朱書で訂正した箇所や、胡粉で本文を削除している箇所、上欄への註記など、多くの書き込みが見られ、特に巻頭の「念仏為先」が貼り紙で「念仏為本」に訂正されている箇所は注目される。これらの書き込みが、誰によるものかは不明であるが、湛如上人かあるいはその近い人物、あるいは本書を相承した文如上人であった可能性もある。

數之所能知諸菩薩衆亦復如是舍利弗
彼佛國土成就如是功德莊嚴又舍利弗
極樂國土衆生者皆是阿鞞跋致其中
多有一生補處其數甚多非是算數所能
知之但可以無量無邊阿僧祇說舍利弗

衆生聞者應當發願願生彼國所以者何
得與如是諸上善人俱會一處舍利弗不
可以少善根福德因緣得生彼國舍利弗
若有善男子善女人聞說阿彌陀佛執持
名号若一日若二日若三日若四日若五日若六

23

仏説阿彌陀經

一巻一冊（後秦）鳩摩羅什訳 享保十（一七二五）年南谷筆

縦二九・二×横一四・七cm

〔請求記号〕O21.131.1〕

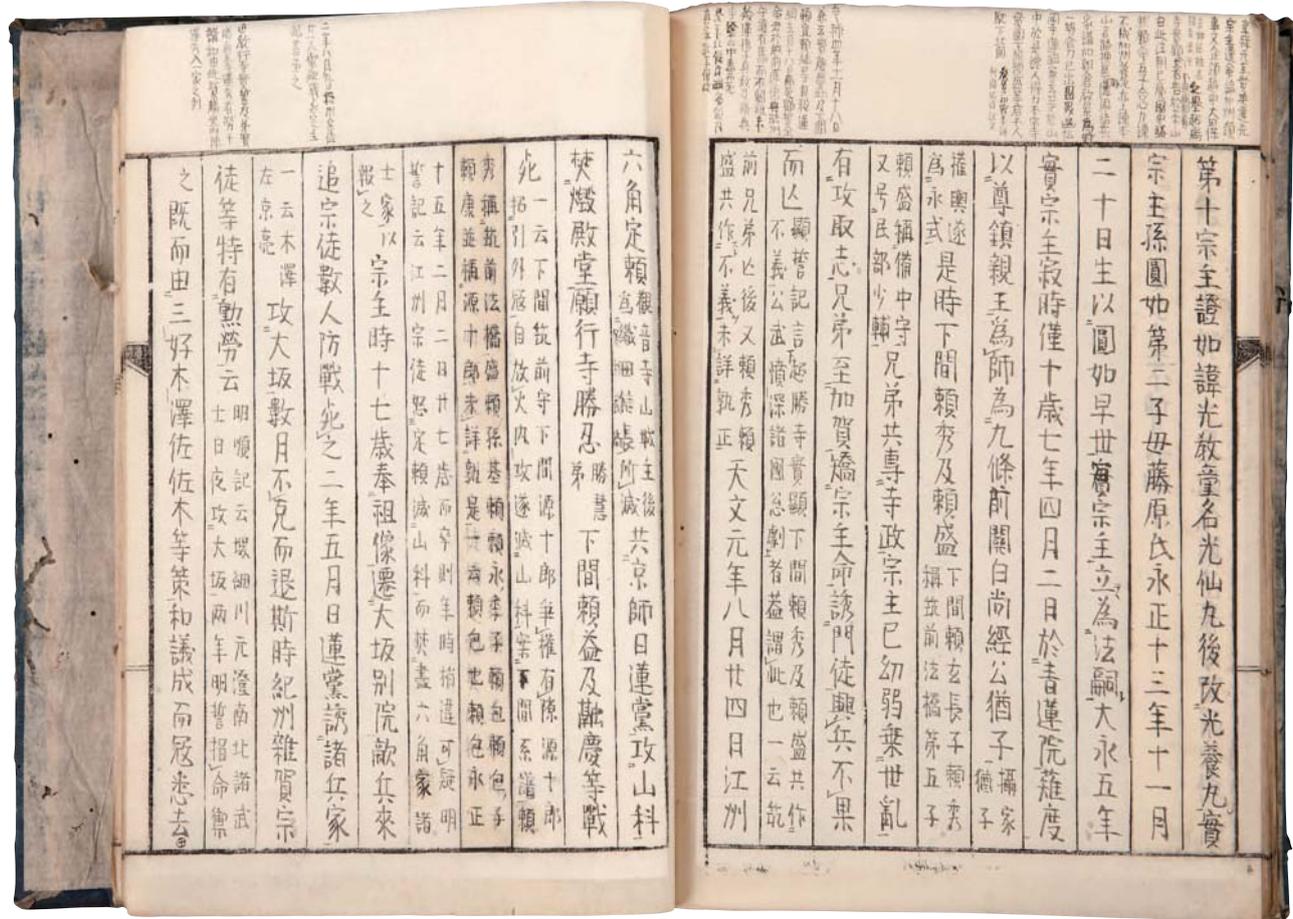
中国後秦の鳩摩羅什（三四四～四一三、一説三五〇～四〇九）が訳出したもので、『阿彌陀經』『小經』とも呼ばれる浄土三部經の一つである。祇園精舎において釈尊が問いもなく自ら説かれた経であることから、無問自説経ともいわれる。極楽世界の相や阿彌陀仏・聖衆の功德などが説かれ、念仏によつて往生できる旨が示される。また、後半部分には、東南西北、下方上方にいる仏たちが、ここに説かれる教えが真実であると讃えて勧める旨が述べられている。

今回展示するものは、奥書に「享保十龍次乙巳歳九月下浣老衲南谷肅拜／書于幻華堂（印）（印）」とあることから、享保十（一七二五）年に南谷（生没年不詳）なる人物が書写したものであることがわかる。南谷は大通寺（現在の京都市南区）に住居した能書家・作家家で、湛如上人の書と文学の師としても知られている。

第十七代宗主 法如上人ほうじょうにん（一七〇七～一七八九）

法如上人は、本徳寺寂円（良如上人の第十子）の二男として生まれ、童名を春千代、諱を光闡、院号を信慧院という。享保五（一七二〇）年に顕証寺に入寺したが、第十六代宗主である湛如上人の継嗣静如（一七二二～一七九六）が引退したことを受けて、寛保三（一七四三）年に本願寺の寺務を継いだ。法如上人は宗主としての在職は四十七年、寂如上人に次いでその年数が長い。阿弥陀堂の再建や親鸞聖人五百回忌法要の勤修、『真宗法要』の出版、明和の法論の解決、宗名の諍論せうろんなど、様々な特筆すべき実績がある。また、公家や武家との親交も深く、本願寺の社会的地位も高かったことから、本願寺の全盛期とも称される。その他、法如上人は諸別院に下向して教化につとめるなど、別院の役割を重視し、吉崎別院・金沢別院・福井別院・山科別院・北山別院・築地別院などの整備に尽力した。延享五（一七四八）年には蓮如上人二百五十回忌法要を勤修し、これが蓮如上人遠忌の初めとされる。なお、法如上人は書画への向学心が強く、書家としては慧堂、画人としては乾亨斎と号した。宗祖五百回忌法要で用いられた『浄土三部経』は、法如上人の染筆にかかるものであったという。書家の松下烏石（一六九八～一七七九）との親交もよく知られている。





24 おおたにほんじんつうき
大谷本願寺通記

十一冊(他) 玄智著 江戸時代後期自筆 縦二七・四×横一九・四cm(等)
〔請求記号 022.26(12)〕

本書は、本願寺派の歴世宗主伝、ほうふかほうりやうてん旁附法胃伝、ほうりやうてん旁門略伝、諸弟諸伝、近世学侶伝、殿堂營構、別院縁由、法事諸式などの十二部で構成される、当時の真宗史を集大成したものである(『真宗全書』巻六十八所収)。天明四(一七八四)年閏正月二二日に法如上人の命を受けた玄智(一七三四～一七九四)が著した。玄智は、本書の他に『考信録』『非正統伝』などを著した、本願寺派における歴史の大家であると同時に、『教行信証光融録』(四十巻、『真宗全書』巻二十四・二十五所収)など、現在でも参照されるべき多くの教学書を遺した人物である。

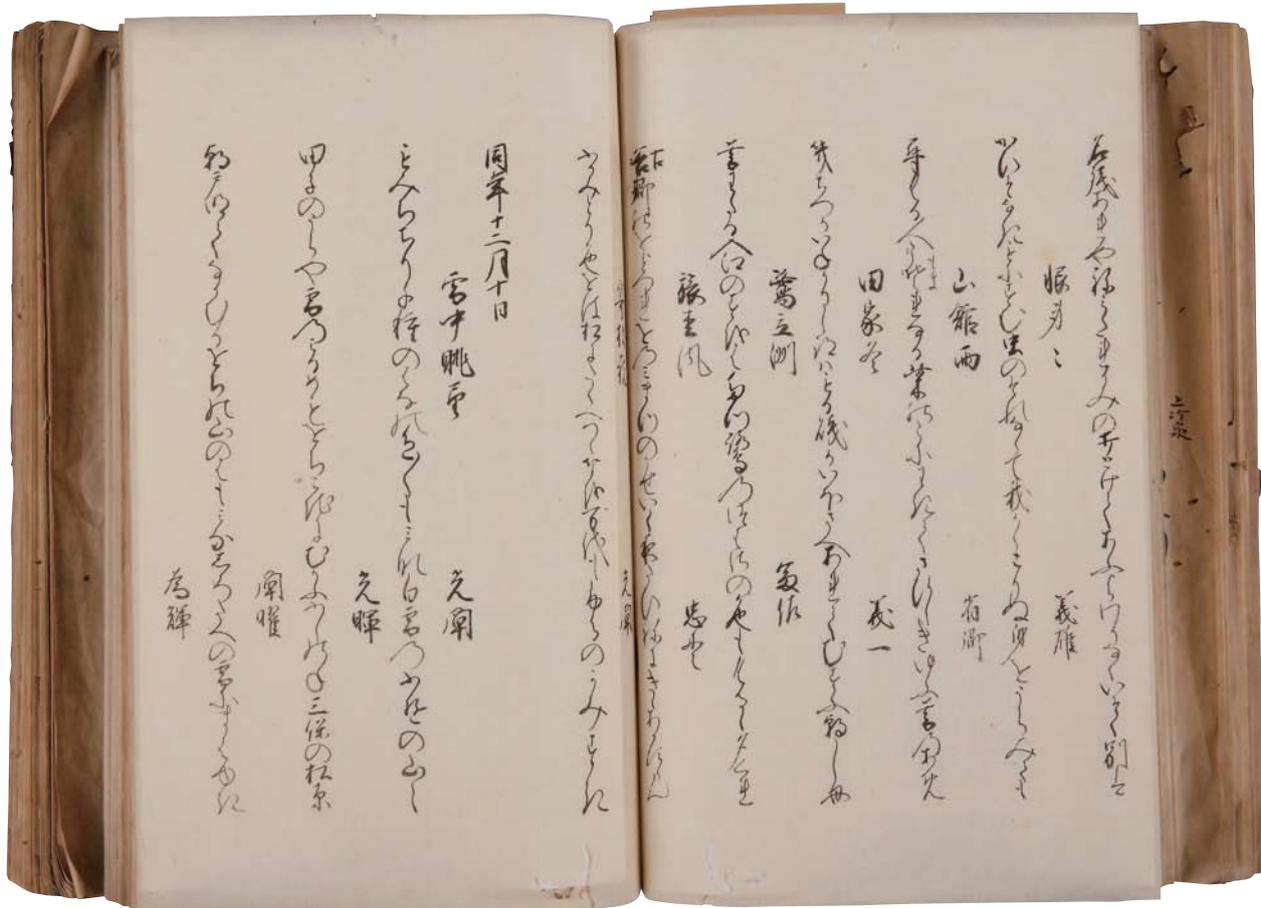
今回展示するものは自筆草稿本であり、『真宗全書』所収本の底本として用いられている。法如上人の項の十頁分(『三月映姫』さんがつえいぎから「頌歌」しょうかまで)など、他の伝写本に見られない部分もある。その筆致などから、玄智の本書にかける情熱が感じられる。

第十八代宗主 文如上人 (一七四四～一七九九)

文如上人は法如上人(一七〇七～一七八九)の長男で、童名を完千代満と称したが、後に九条尚実(一七一七～一七八七)の猶子となって幸君と改めた。諱を光暉、院号を信入院という。幼少の頃から病弱であったが、絵画・雅楽・茶道・詩歌・書道・声明などに意を注ぐところが多かった。また、宗・余乘(真宗の教義とそれ以外の仏教教義)を僧侶や道粹・泰巖・僧録・功存などから教授されている。また、『真宗法要』の事業においては諸本の校合の任にも携わり、学林所化(学問を修める本願寺の寮舎の受講生)に対して学則を講演するなど、宗学面に尽力した。なお、文如上人が宗務を補佐していた時代の自筆日記『颯聆録』(本願寺蔵、安永四(一七七五)年～七(一七七八)年)が現存している。

文如上人が法如上人から法統を継承したのは、法如上人の示寂した寛政元(一七八九)年である。その時、文如上人は四十六才であったから、生涯の大半を法嗣として過ごし、宗主としての在職は十年に満たない。しかし、在職期間には興正寺との不和の是正や天明の大火からの学林の復興、蓮如上人三百回忌法要の勤修など、多くの事業を成し遂げている。また、病弱であったために地方巡化が困難であった宗主は、法義に関する長文の消息を多く発布して、法義の顕彰に力を注いでいる。この他、歴代宗主の中でも多分野に秀でた人物で、書道を松下烏石から和歌を柳原光綱から、漢詩を僧樸から、笛を岡右兵衛から、声明を香房堂達から教授され、絵画や茶道もたしなんだという。なお、自筆日記『颯聆録』や家臣の業務日誌『錦花殿御次日記』などから、文如上人には医学の知識があったことが知られる。写字台文庫には医学関係の書籍が収められているが、父である法如上人の蔵書目録『御風楼蔵書目録』には医学書が数点しか見られない。このことから、文如上人は自身が病弱であったことから医学に関心を持ち、医学書を蒐集し、写字台文庫に収蔵したと考えられる。





26
和歌集

一巻一冊 編者不詳 江戸時代後期 縦二六・九×横二〇・一cm
 (請求記号 911.206.31W 写子(豆文庫))

歴代の本願寺宗主には和歌に関する逸話が多い。例えば、親鸞聖人は出家得度の際に「明日ありと 思ふ心の仇さくら 夜半に風の 吹かぬものかは」と詠んだと伝えられる。また、覚如上人も『閑窓集』を編んで、自ら詠じた和歌千首を収めたという。この他、蓮如上人の和歌も約三百首ほど現存しており、伝道的手段として用いられたという。

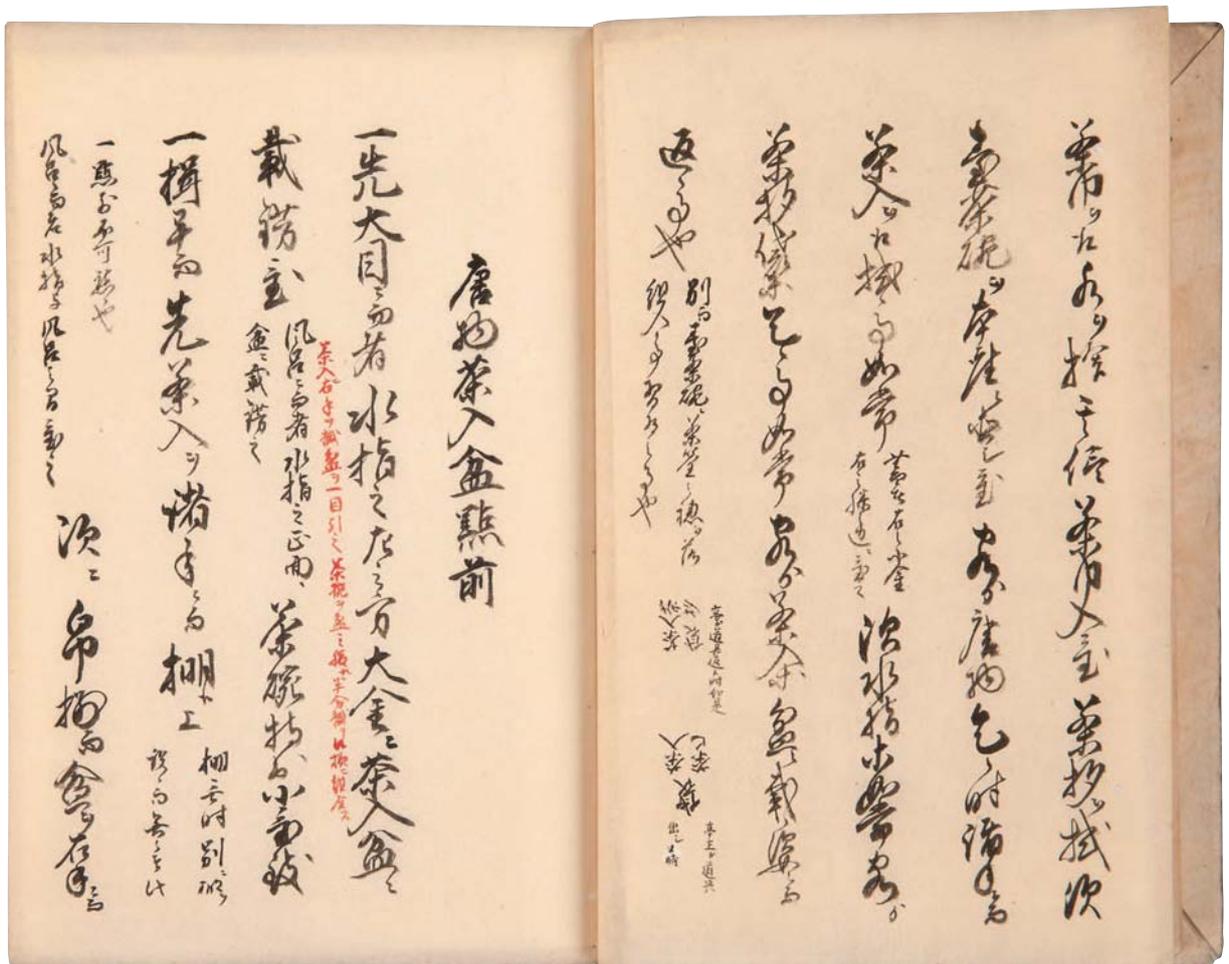
本書は、文如上人の和歌が掲載された和歌集である。文如上人は、文学・文筆を家業とする柳原光綱から和歌を教授されている。「宝暦六年」(宝暦七年正月廿七日/当座御会)「宝暦九年正月廿九日/当座御会」などの中表紙があることから、当座にて詠まれた作品を集めたものと思われる。文如上人の歌として、「もみぢちり 千種のはなの 色々もみな白雪の ふゆの山々」(光暉)などが収められている。

27 茶源 ちやげん

一卷一冊 著者不詳 江戸時代中期写 縦・四・五×横二一・一cm
 (請求記号 791.129W 写字台文庫)

本願寺宗主と茶湯との関係は古く、覚如上人の時代から史料にかいまみられる。その後、歴代宗主に受け継がれ、織田信長から和陸の証として顕如上人に贈られたと伝える茶器「一文字」は有名で良如上人の時代には、茶頭として藪内家が出仕するようになり、藪内家を通して、茶湯との関係が深まっていく。特に文如上人は茶道に深い関心を寄せた宗主として知られ、藪内家との交際についても宗主の自筆日記『颯聆録』にその名が見える。文如上人は藪内家初代の年忌法要には金品を贈り、藪内家での利休の二百回忌法要には漢詩を贈り、藪内家六代目紹知宗堅から『茶法口義』二冊の伝授を受けるなどしている。

今回展示するものは、文如上人の別号である「悠悠子」が末尾に記されていることから、文如上人の所持本であることがわかる。「悠悠子」は、詩歌や絵画をものした際に用いた号という。本書の内容は茶道に関するものであり、文如上人と茶道との関係をうかがい知ることのできる貴重なものである。



太僕章句 新定章句

倒倉論 相火論

左大順男右大順女論

茹淡論 吃逆論

房中補益論 天氣屬金說

張子武文擊注論

人海廉口論 春宜論

真脈論 受印論

喉嚨吐納林蒸論 韻嚴轉氣麻論

格致餘論

金華 朱彦脩 撰
新安 吳中珩 校

飲食色欲箴序

傳曰飲食男女人之大欲存焉予每思之男女之欲所關甚大飲食之欲於身尤切世之淪胥陷溺於其中者蓋不少矣苟志於道必先於此究心焉因作飲食色欲二箴以示弟姪并告諸同志云

飲食箴

人身之貴父母遺體為口傷身滔滔皆是人有此身

28 格致余論

一卷二冊 (元) 朱震亨撰 明代刊 縦三五・三×横一五・六cm
〔請求記号 G009.303W 写字台文庫〕

本書は中国の朱震亨(一二八一〜一三五八)が著した医書である。朱震亨は字を彦修あまといい、金・元時代に活躍した漢方医である金元四大家(劉完素・張子和・李東垣・朱震亨)の一人で、日本においても重要視された人物である。至正七(一二四七)年に記された序があり、これが本書の成立年代と推測される。本書の中には、儒学を下敷きにした医論が展開されており、曲直瀬道三(二五〇七〜一五九四)が取り入れて日本で普及し、江戸時代前期を中心にして多くの刊本や注釈書が著されている。江戸時代を代表する医学書である。今回展示するものには、長方形の写字台蔵印が押されている。写字台文庫には、同じ蔵印が押された医学書が八十五点所蔵されており、これらの多くは文如上人の時代に収集されたものとされる。上人の手になるものであるかは定かではないが、合点や上欄への註記なども書き込まれている。

エレカ丹溪ノ氣ヲ大ニ入ラミリコシクシラシメテクノ王氷カ注シヤ
 ハアリク向ク印テ濕熱トイハル格アルニツク向クケクニニ
 後世濕熱ノ病ヲシラフエサラシムルハ王氷ノ局方ハ諸病ノ寒
 コリクコトニテ熱ヲニテアタムルコトヲシタリ述金匱之治法一
 ア金匱ハ金匱要書ヲ云コレヲ履衣ヲイフコトハ昏ノ名
 アラスト見洗ハタマシ、ソ故ハ局方衆揮ニ和割局方ノリイ
 コトヲ正スハミナ仲景ノ金匱要書ヲ引テ正サシタラスハ
 タシカニ金匱要書ノト見ルコト古人ハ爲吾儒一ニシテ
 格致致知スルヲアテリニ論スニコレテ格致余命ト云説アリク
 レイナタマアタリ説ニ餘ノ字ニナツムカラスタニ格致
 知ノコトヲ昏タリトシ、医ハ儒格致致知ノ一事ニシテ
 コトヲ昏タリニ格致余命ト目ケタリト見ルニシ

格致餘論

金華朱彦脩撰

金華の地名朱の姓彦脩の字の傳ハ萬姓統譜ニ出タリ又丹

飲食也歌箴序

漢翁傳トイフモトアリ

コノ昏ノ首ニ飲食也歌箴ツノスルコトハ本クコロリ素問
 上古天真論ニ飲食也歌ノコトヲ説クツレニ效タルモト醫
 道ハ藥ヲモテテ瘳治スルコトヲコトフエタメスルコトニシテ
 タニ飲食也歌ツシムカラレハ一ノコトニ

傳同飲食男女

傳ハ礼記礼運篇ニコノ中ニタマフニ

一句ヤルノ死之貧苦人ニ大悪存焉トアリコレクツレテニ
 ノ飲食ハ味甘養ナレニニ人ノ欲スルコトハ人ノ也カクテ欲シキ
 カクテ欲ハ人情ノ常ニ男女ノ欲所因甚大トハ天地生化ヲナス
 生タスルコトモ男女陰陽ノ道ニシテハコノ欲ハ大ナリ也カクテ

29 格致余論講義

一巻一冊 松岡玄達録 江戸時代中期自筆 縦三二・七×横一七・〇cm
 (請求記号 090.9.338 写字台文庫)

本書は中国の朱震亨(一一八一〜一三五八)が著した医書『格致余論』
 を、江戸時代前期の医者である浅井周伯(一六四三〜一七〇五)が講
 義したものを、松岡玄達(一六六八〜一七四六)が筆録したものである。
 写字台文庫には玄達自筆本が十部所蔵されている。玄達は、儒学を山
 崎闇斎・伊藤仁斎に学び、本草学を稲生若水に学んだ本草学者で、そ
 の名を冠する書は八十部ほどあり、儒学・神道・医学・本草学など多
 分野に渡っている。
 医学の知識は、原則として無断で門外へ流出するような性格のもの
 ではない。玄達の死後、門下生たちによって遺稿は管理されていたも
 のの、その門下生たちの死にともない、玄達の遺稿も流出したとされる。
 文如上人は医学に対する関心が深く、写字台文庫には上人の時代に収
 集されたと考えられる八十五点の医学書が所蔵されている。これらの
 ことから、本書は文如上人が医学書を収集する過程で写字台文庫に収
 められることになったと考えられる。

第十九代宗主 本如上人 (二七七八～一八二六)

本如上人は、文如上人の次男で、童名を孟丸、諱を光撰、院号を信明院という。本如上人は容姿端麗であったようで、寛政八（一七九六）年に文如上人と共に江戸へ下向した際、諸人が賛美したという。その後、寛政十一（一七九九）年に、文如上人が往生を遂げたことにより継職した。本如上人の事績としては、文化三（一八〇六）年に、大規模な教義論争であった三業惑乱の裁断書である『御裁断申明書』『御裁断御書』を発布したことや、興正寺との紛擾の解決、御影堂の修復事業の完遂、親鸞聖人五百五十回忌法要の勤修などが挙げられる。

本如上人は余技に明るく、詩歌・茶道・陶芸・雅楽などが知られている。また、特に絵画への造詣が深く、吉村孝敬に師事し、画家の応挙・呉春・吉村蘭州・吉村孝政・皆川淇園などと交遊があったという。本願寺書院の障壁画の内、檜の間・芙蓉の間・浪の間は吉村孝敬、耕作の間は呉春の手になるものであり、その親交ぶりがうかがえる。本如上人は「碧山」または「不捨」と号して絵画をしたという。



花鳥図・瓢之図

かちょうず ひょうのす

各一幅 本如上人画 江戸時代後期 縦九二・〇×横三四・八cm (花鳥図)、
縦一〇〇・〇×横三六・〇cm (瓢之図)
〔書林記〕 021.1.158.1 (花鳥図) / 024.1.175.1 (瓢之図) 〕

本如上人は絵画への造詣が深く、「花鳥図」「瓢之図」いずれも上人が描いたものである。それぞれ本如上人の号「碧山」と記されている。

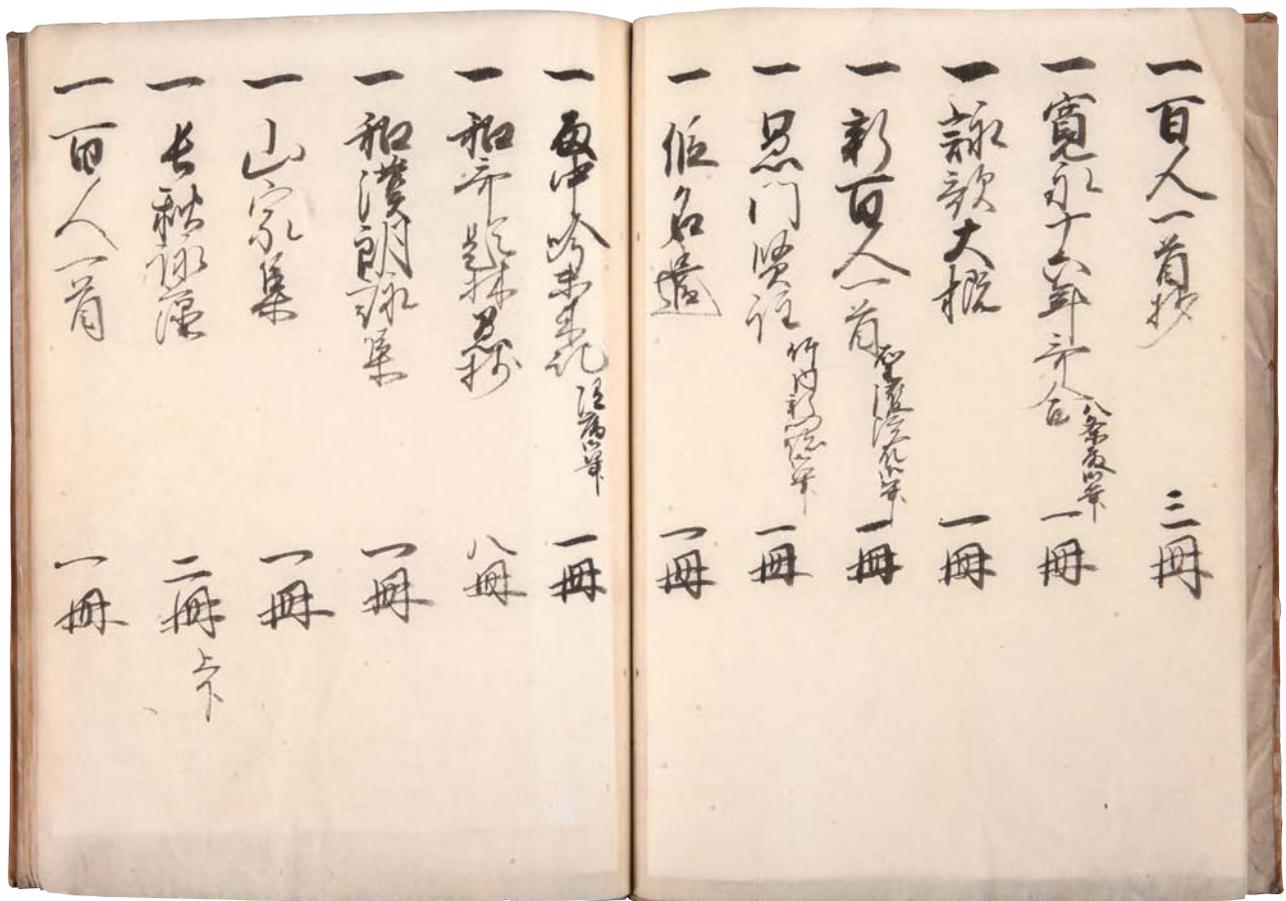


花鳥図



瓢之図

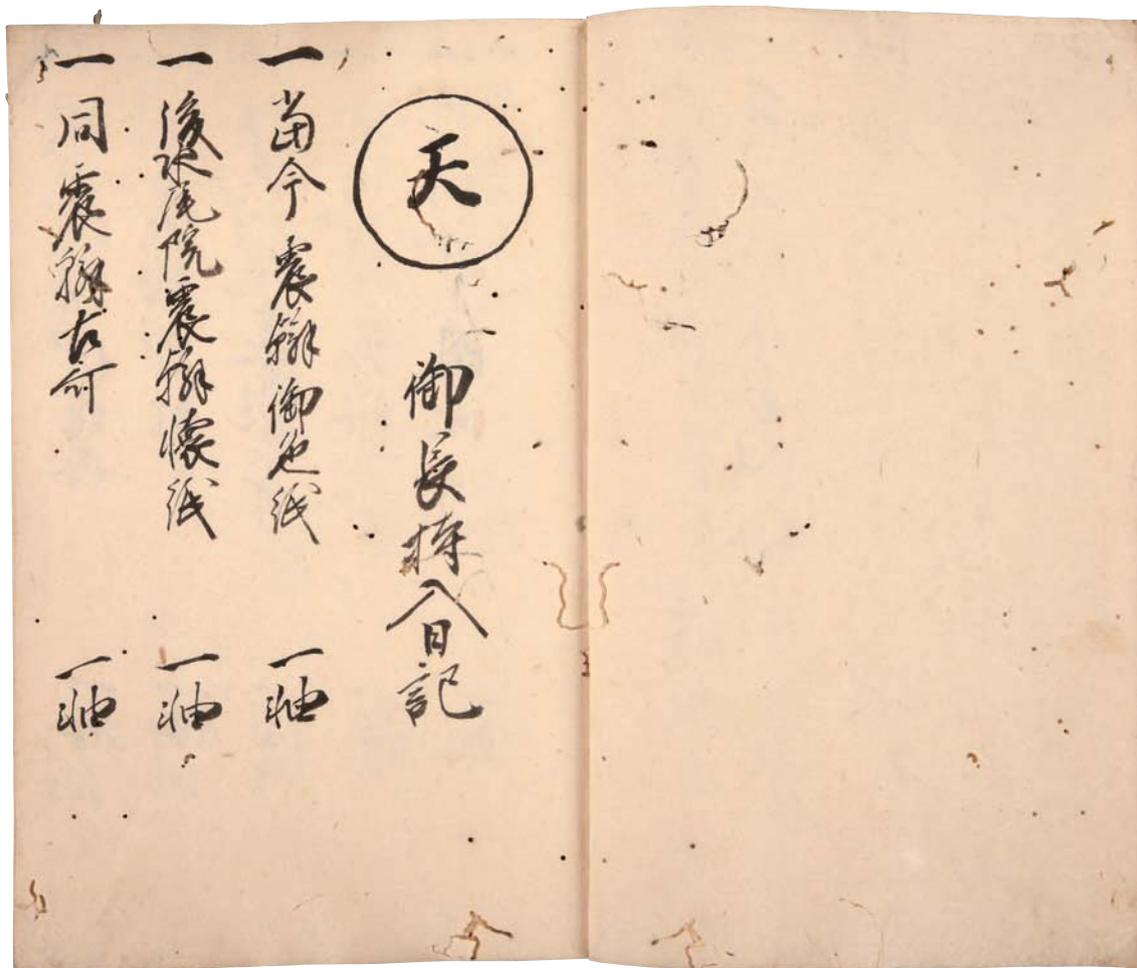
本願寺宗主と諸典籍



31 草子之目錄

一冊 寛永十八（一六四二）年書 縦二八・五×横二一・五cm
 〔請求記号 022.091-1 写字台文庫〕

娯楽的な本である草子（草紙）について記録された『草子之目錄』は、寛永十八（一六四二）年に作成された。目錄の日付から、第十三代宗主良如上人（一六一三〜一六六二）の時代にあたる。この頃の蔵書の一記録として、和歌や物語を中心に記載されている。
 なお、本目錄には、作成年次が明らかでない『御書物日記』が合綴されている。本来は別書物であったものが、龍谷大学に下付された後、一緒に綴じられたと考えられる。

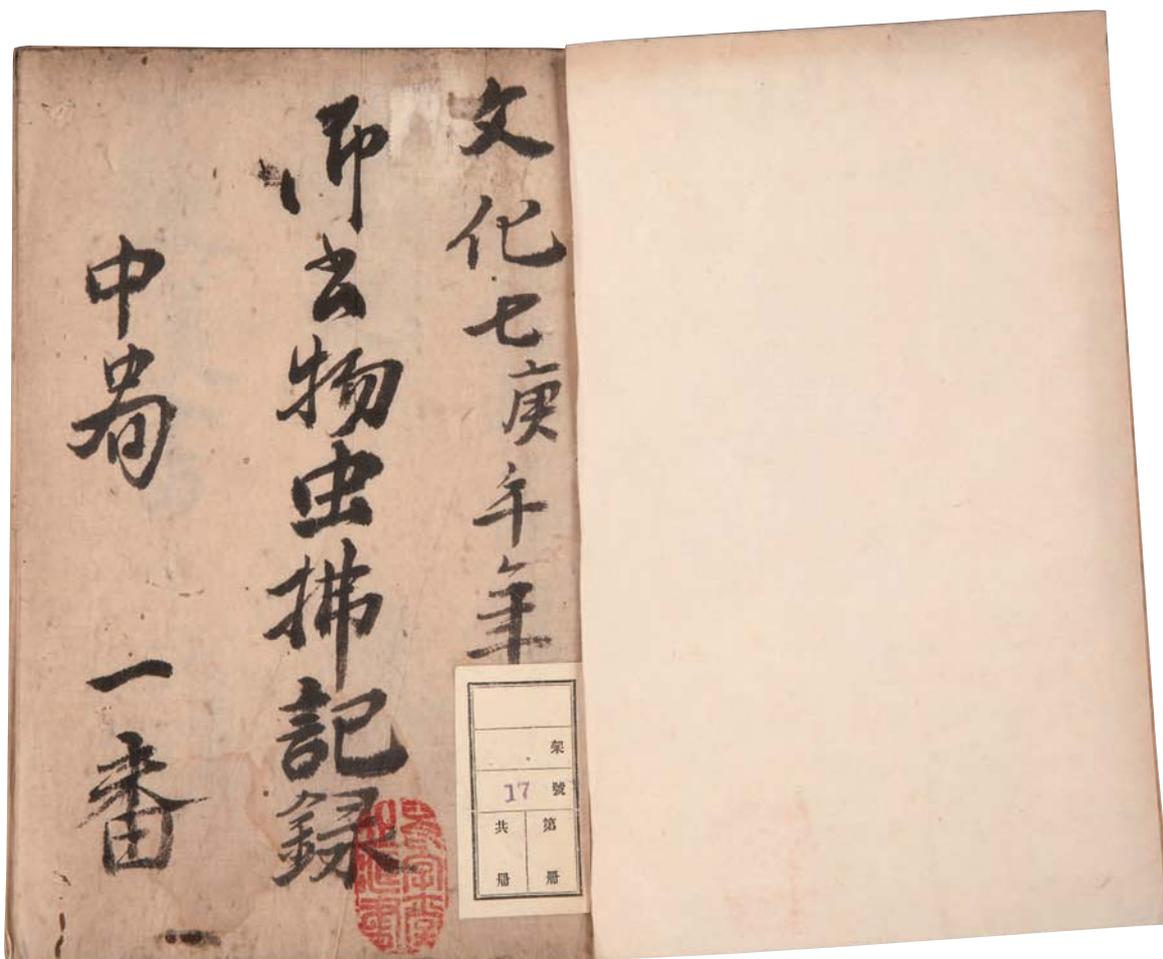


32

西御文庫御道具入日記

一冊 延宝五(一六七七)年書 縦三〇・〇×横一〇・五cm
 (請求記号 022.349.1)

第十四代宗主寂如上人(一六五一～一七二五)の時代である延宝五(一六七七)年に、本願寺所蔵の道具類・書物類を一括して記載したのが本目録である。西御文庫の一階にあってと思われる五つの長持とその中身である道具類・書物類、併せて二階にあった道具類・書物類が記録されている。この時期、道具類と書物類の明確な区別なしに管理がなされていたことがうかがえる。



33 御書物虫払誌

二冊 文化六年・七年（一八〇九〜一八一〇）書

縦二一・五×横一五・八cm

〔請求記号 201.722 写字台文庫〕

本書は、文化六年から七年（一八〇九〜一八一〇）にかけて行われた書物の虫払いの記録である。第十九代宗主本如上人（一七七八〜一八二七）の時代にあたる。

二冊からなり、第一冊目によると文化六年七月に、第二冊目によると文化七年二月に虫払いが行われている。

各冊に虫払いされた書物が記されているが、第一冊目には小説・画譜・文学・歴史書などが、第二冊目には漢籍を中心とした史書・医書・諸子百家の書などがそれぞれ記されている。察するに全蔵書をいくつかに分けて虫払いをしていたようである。

これらの記録により、幕末に写字台文庫が整理される以前の本願寺の蔵書の内容を知ることができる他、蔵書管理の一端をうかがうこともできる。

広如上人御影

一幅 制作者不詳 明治前期頃画 縦一七七・五×横六三・五cm
〔請求記号 021.143-1〕



第二十代宗主である広如上人（一七九八～一八七二）は文政九（一八二六）年、第十九代宗主本如上人の遷化により継職し、財政再建を図るとともに、幕末維新期の教団運営を指導した。

また、教育にも力を注ぎ、それまでの歴代宗主が所蔵していた書物を、弘化三（一八四六）年から安政三（一八五六）年まで十年掛かりで整理させ、「写字台文庫」と名付けて、本願寺の子弟が利用できるようにした。

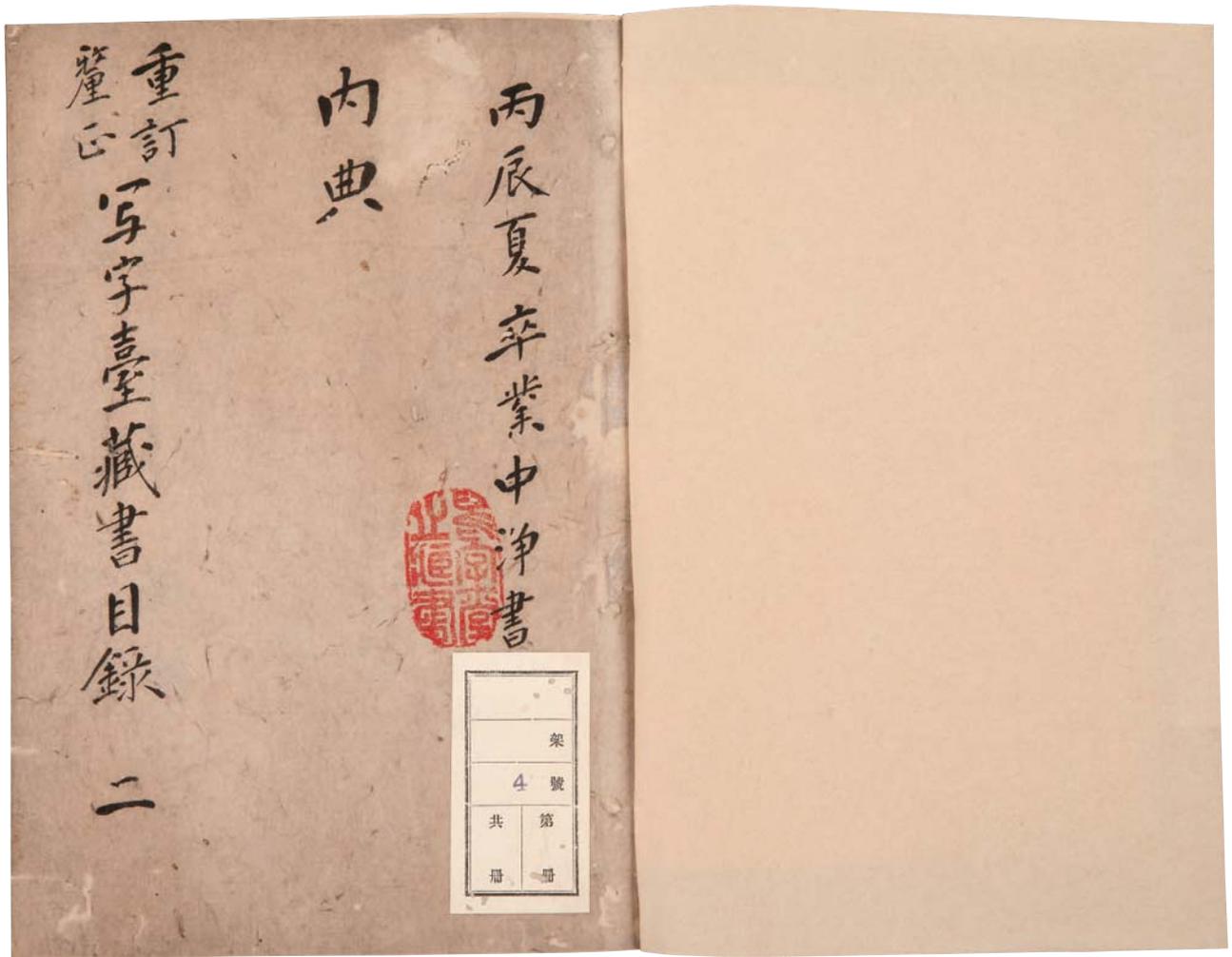
明如上人御影

一幅 製作者不詳 明治末期頃画 縦一九九・三×横七六・五cm
〔請求記号 02.1.174.1〕



第二十一代宗主である明如上人（大谷光尊師、一八五〇～一九〇三）は、幕末維新期の困難な状況の中で、第二十代広如上人を補佐し、明治四（一八七二）年に継職した。学僧であった島地黙雷（一八三八～一九一）らを海外視察に派遣し、ヨーロッパの宗教・教育事情を学んで、教団組織の近代的再編成に取り組みとともに、国内外の開教にも尽力した。

本学には、明治二十五（一八九二）年と同三十七（一九〇四）年の二回にわたり、本願寺より「写字台文庫」が寄贈されたが、これは、明如上人の斡旋によるものであり、現在に至るまで、龍谷大学のさまざまな分野の教育・研究に活用されている。



36

重訂釐正写字臺藏書目錄

九冊 安政三（一八五六）年浄書 縦二一・八×横一六・四cm
 （請求記号 201.7149 写字台文庫）

本願寺歴代宗主の蔵書は年々増加し、それにもなって幕末頃には所在不明の蔵書が多くなり問題となっていた。第二十代宗主である広如上人は、弘化三（一八四八）年から安政三（一八五六）年にかけて家臣に命じ蔵書の調査と整理を行わせ、目録を作成させた。

本目録は、安政三（一八五六）年に浄書されたが、それ以前に、前身となる『写字台文庫目録』などがあり、調査と整理の過程で修正が行われて、本目録の完成に至ったことが知られている。

龍谷大学に現存するこれら写字台文庫の目録は、それぞれ欠本があり完全ではない。それぞれの目録を補い合うことによって、ほぼ当時の全貌を知ることができる。仏教関係書籍一四〇九六冊、その他の書籍二八〇五八冊、合計四二二五四冊となる。

陋矣巖者猶恐不免舛謬後
来君子幸正之

安政七年庚申六月

臣平巖謹撰



凡例十一則

- 一 今釐正スル所舊冊ニ仍テ内典外典
和書ノ三大門トシ毎門部類ノ分チハ
内典ハ學林藏書目錄ニ據リ外典ハ
四庫全書目錄ニ從ヒ参考スルニ聖堂
書籍目錄ヲ以テス和書ハ大畧羣書
一覽ニ推テ稍沿革ヲナス
- 一 毎部類序次ノ列ハ作書ノ新古ニ依テ

37

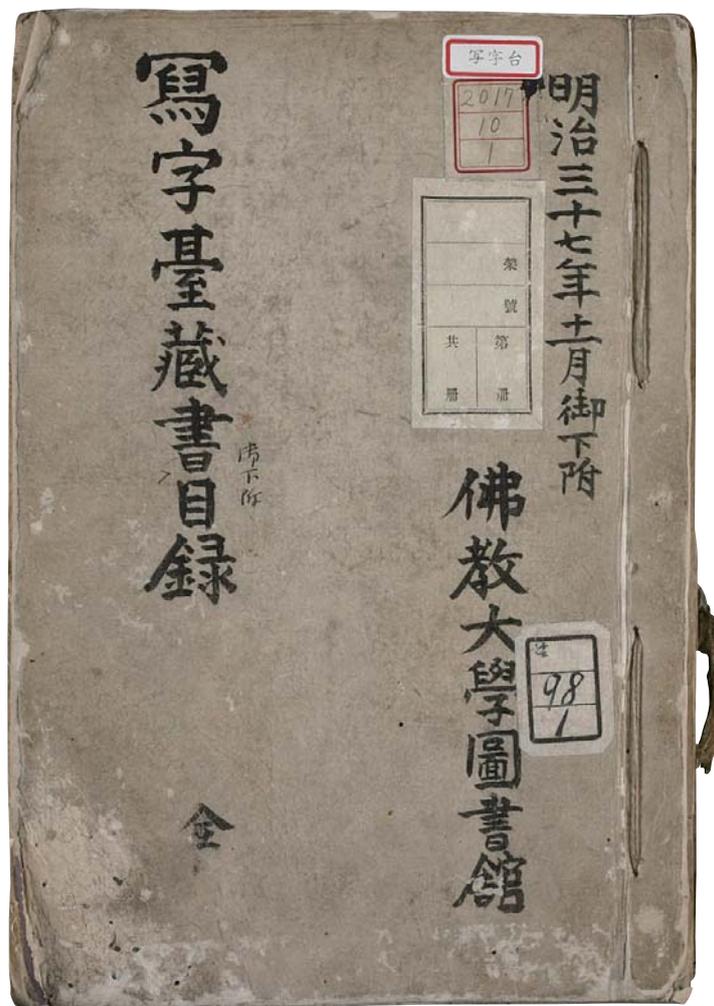
写字台文庫目錄定則

一卷 平巖(大喜多左司馬)著 安政七(一八六〇)年書

縦二八・三×横二〇・二cm

(請求記号 0241.280.1 新写字台文庫)

- 本願寺第二十代宗主広如上人による蔵書の分類・整理とほぼ同時期に、本規則が定められている。これは整備された文庫をより一層活用するため、目錄に関することにとどまらず、文庫の運用全般について規定したものである。その内容は次の五項目に要約することができる。
- 一、由緒ある蔵書を大事にすべきこと
 - 二、書物の虫干しの時期に関すること
 - 三、図書の出納に関すること
 - 四、新規入蔵書の分類に関すること
 - 五、図書の借用に関すること
- これは、宗主の文庫である「写字台文庫」の重要性を主張する反面、一定の規則を設けて帯出の自由を認めていることから、宗主の私的な文庫が、宗門を中心とした半ば公的な文庫へと発展したことを示している。



38 寫字臺藏書御下附目録

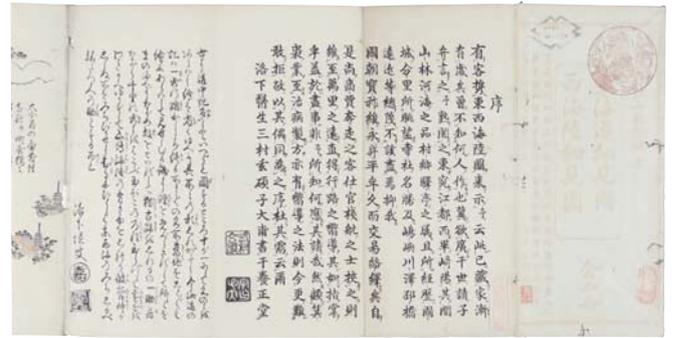
一巻一冊 編者不詳 明治三十七（一九〇四）年書

縦二四・五×横一六・五cm

〔請求記号 201.7101 寫字台文庫〕

寫字台文庫は、明治時代に入り、第二十一代宗主明如上人の意向により、龍谷大学図書館に寄贈された。第一回目は、明治二十五（一八九二）年に、まず十九函が、龍谷大学の前身である学林に寄贈された。この時の正確な部数・冊数は不明である。しかし、第二回目の明治三十七（一九〇四）年の寄贈に際しては、本書が作成され、その内容をはっきりと知ることができる。それによると、総数は二七三九部、一一六四九冊であり、最初の十九函分を合わせると、寄贈された寫字台文庫の総数は、およそ三万冊になると推定されている。

なお表紙には「佛教大学図書館」となっているが、当時の龍谷大学の名称が佛教大学であったことによる。その後、大正十一（一九二二）年に佛教大学から龍谷大学に改称した。



江戸から長崎までの道中図であり、前半の二帖が東海道、後半の二帖が西海道となっている。東海道部分は余白に名所や里程の記述があり、西海道部分は海路の距離のみが示されている。

本書は、国立公文書館所蔵本と同じく、多摩川に架けられた六郷橋の記載がないことから、享保年間（一七一六〜一七三六）以降の補修本であると思われるが、比較すると表紙見返し部分や各図の色使いが異なっており、刷られた時期に差が見うけられる。

39

とうかいとうさいけんず
東海道細見図

さいかいりくさいけんず
西海陸細見図

四帖 享保以降刊

第一帖縦三四・〇×横五二五・一cm 第二帖縦三三・八×横五四六・二cm

第三帖縦三三・八×横三六三・八cm 第四帖縦三四・〇×横三六四・七cm

〔請求記号 023294 写字台文庫〕

南州から五十年

讀史餘論上

一 本朝天下の大勢九変して武家のみならず武家の代
よむ 五変して南代も亦も北論のま
神皇正統記も先考より上つて一向上古也との例
と勘あるに和より下りるも亦も北論のま 五十六代
足利初之はく外祖良房捨政す是外戚寺社の
始一基経外傳の親よりりて湯成と条一先考
と建し天下の横ぬは後氏よりりて關白とを
式は富より代わりしと後氏の横ぬのりしは
威也と五十六代迄泉も國融苑山一條三條隆一條

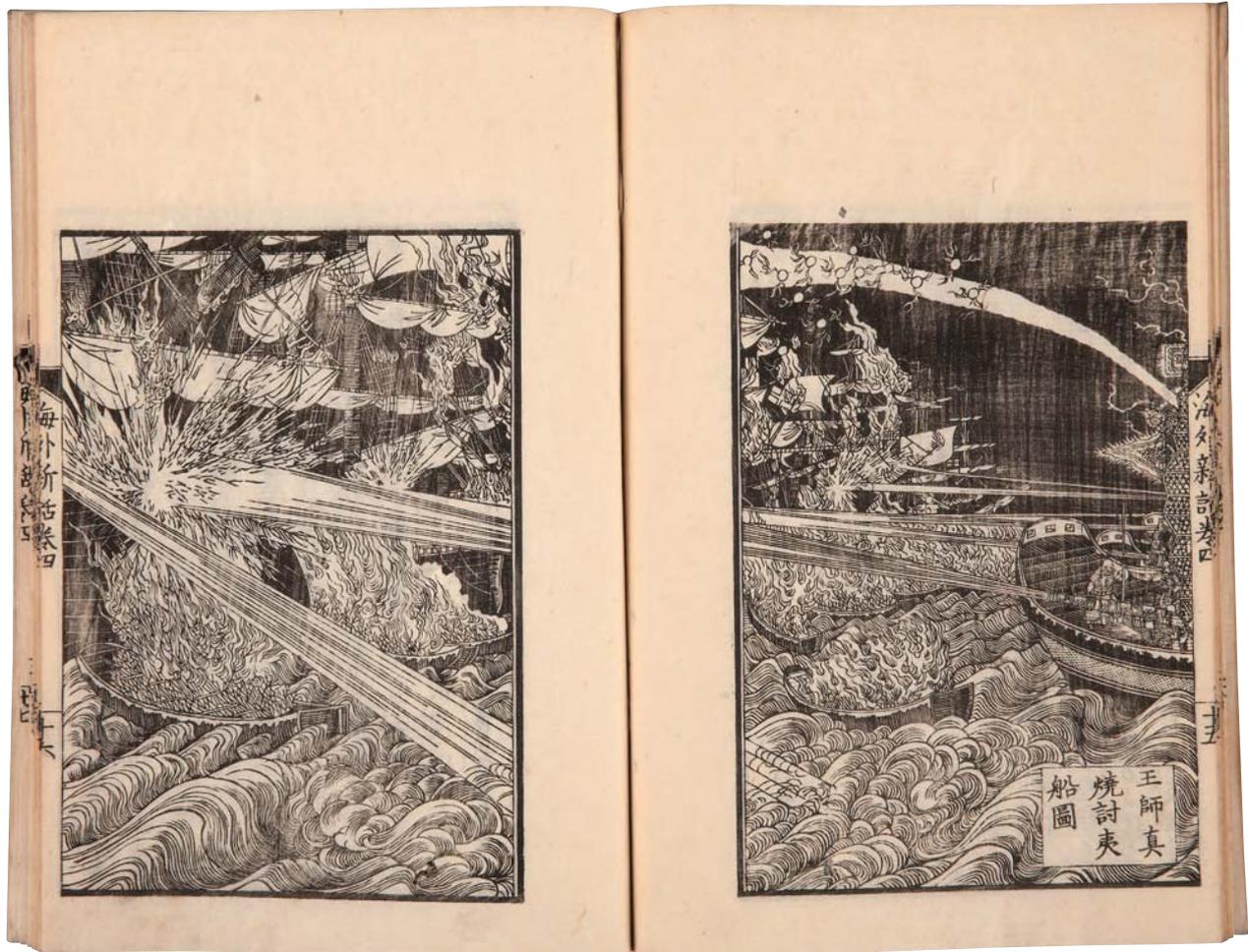
40 讀史餘論

三卷 新井白石著 安永九（一七八〇）年写 縦三・八×横二六・五cm
〔請求記号 410.04-673〕

撰関政治の開始から江戸幕府の成立に至るまでを、和文の編年体（年
月の順を追って史実を記したもの）で記述した歴史書。この書は、新
井白石が六代將軍徳川家宣の侍講として、正徳二（一七一一）年に日
本の沿革や古今の治乱について講義をした際の草稿がもとになってい
る。それを白石の門人土肥元成が清書、さらに白石の末子宣卿らが書
写したものに、白石が跋文（あとがき）を記したものである。

内容は、白石独特の考えに基づいた時代区分がなされ、武家政治成
立の過程を明快に整理している。その背景にあるのは、正しい者は栄
えそれに反した者は滅びるといふ儒教的倫理思想であり、為政者のた
めの教訓的な史書として高く評価された。

なお、本書は書き込みが多数あり、当時頻繁に使われていたことを
物語っている。



41 海外新話

五卷 嶺田楓江著 嘉永二（一八四九）年刊 縦二六・〇×横一八・〇cm
 （請求記号 422.06-16-5 写字台文庫）

『海外新話』は、清とイギリスが争ったアヘン戦争（一八四〇〜一八四二）の顛末を庶民向けに著述したものである。著者の嶺田楓江（一八一七〜一八八三）は、丹後国田辺藩士、嶺田矩俊の次男として江戸に生まれた。昌平黌で儒学を修め、箕作阮甫（一七九九〜一八六三）に蘭学を学び、諸国を遊歴して蝦夷地にも赴き、北方警備の必要性を主張した。

楓江はアヘン戦争の事情を詳述して、日本に迫る外圧に対する認識を深めようとして、『夷匪犯疆聞見録』をもとに平易な文に改め、橋本貞秀の挿絵を加えた読本に仕立て、嘉永二（一八四九）年に江戸で出版した。しかし、海外事情が一般に流布することを是としなかった幕府の目にとまり、出版手続きの不備を理由に絶版処分を受け、楓江自身も三年に及んで投獄されたうえ、江戸・京都・大坂からの追放刑である三都所払に処せられた。それでも、本書に対する需要は多く、絶版処分後も幕府の目を盗んで重刊され、『海外新話拾遺』・『海外余話』などの類書も多く刊行された。

写字台文庫には、本書の他、『海外新話拾遺』・『海外余話』も所蔵されており、本願寺でも幕府の統制を知らながら、海外事情に注目していたことがうかがわれる。



42

えほんたいこうき
繪本太閤記

初編至八編七十二卷 武内確斎著 岡田玉山画
寛政九（一七九七）年〜享和元（一八〇一）年刊 縦二二・五×横一五・七cm
〔請求記号 913.65-19W-72 写字台文庫〕

文章の読みやすさと絵の面白さから、江戸時代後期の大衆に豊臣秀吉伝説を定着させた作品。当時の民衆は、内容の真偽を判断する手段が他になかったため、伝説というよりも、むしろ真実として、豊臣秀吉が大衆化されていたに違いない。

『繪本太閤記』が完成した三年後の文化元（一八〇四）年に、豊臣氏関係の出版統制により、幕府から絶版命令が出されている。

当時の幕府は、出版について、徳川將軍家に関わる写本の書名、大名・旗本に関わる事柄は、名称すら避ける姿勢であったことが指摘されている。

『繪本太閤記』では、秀吉の活躍の他、家臣達の活躍も描かれていることから、その子孫の大名や旗本にも関わる書物として絶版されたといわれる。（佐藤悟「文化元年の出版統制と考証随筆」『文学』八卷三号）



43

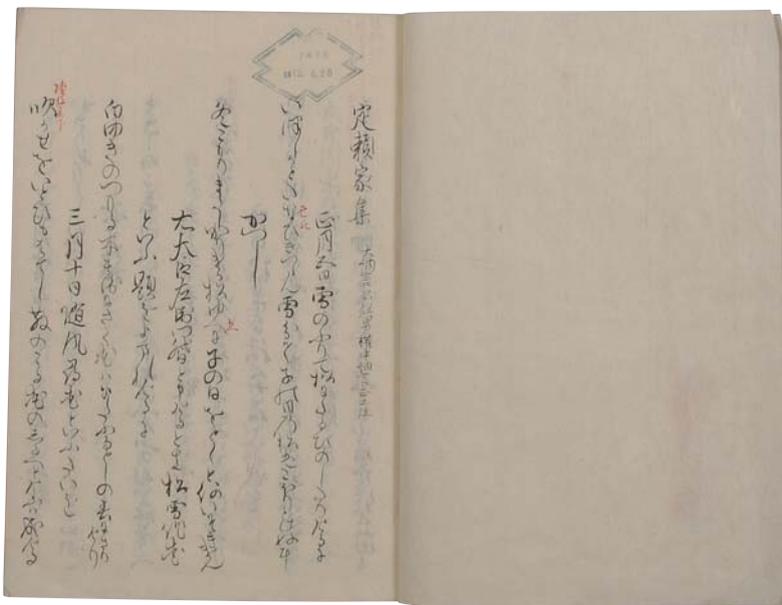
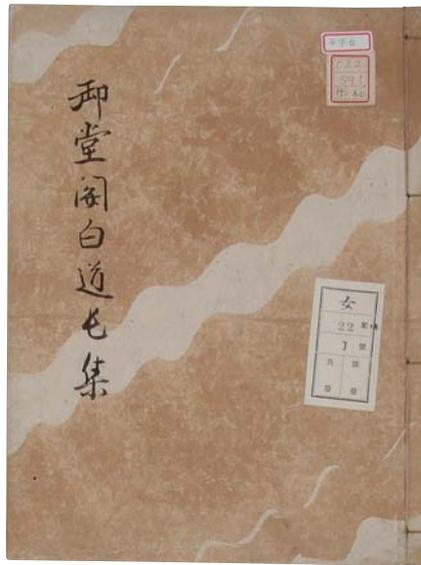
絵本三国志

十冊 桂源吾宗信画 天明八（二七八）年刊
 縦二一・八×横一六・〇cm
 （請求記号 91365259 写字台文庫）

中国の三国時代を扱った『三国志演義』の有名なエピソードを項目別に記した本。項目ごとに、エピソードの一シーンが絵で描かれている。掲載頁は、『三国志演義』の名場面の一つである桃園の誓いを描いたものである。左側の人物が劉備であり、右側が関羽と張飛である。三人はこの誓いにより義兄弟の契りを結んで生死を共にする宣言を行ない、三国の一つである蜀を建国していくのである。

四十人集

四十冊 江戸後期写 縦二七・二×横二〇・〇cm
 (請求記号 022-591-40 寫字書文庫)



平安時代から鎌倉時代にかけての歌人四十一人の歌集を集成した叢書。すなわち、定頼家集・源賢法眼集・本院侍従集・雅兼集・顕輔集・海人手古良集(師氏集)・故侍中金吾家集(頼実集)・典侍為子集・相模集・在良集・弁乳母集・橘為仲集・成仲集・国基集・御堂関白道長集・小馬命婦集・六條修理大夫顕季集・大式集・赤染衛門集・忠盛集・聖廟御詠・相如集・伊勢大輔集・紫式部集・兼澄集・康資王母家集・元良親王集・長能集・惟宗広言集・惠慶集・待賢門院堀川集・道成集・西宮左大臣高明集・実方集・馬内侍集・一宮紀伊集・山田法師集・兼行集・清慎公集・和泉式部集・大江千里集である。当該本の大部分は、小沢蘆庵の門人および知人が書写し、蘆庵が仮名遣いや誤写等を訂正し、校合したもの。蘆庵本『歌合部類』と共に和歌資料として貴重。なお、『龍谷大学善本叢書十八 四十人集』(家郷隆文編)に当該本の影印を収める。

911.407
12
1



芭蕉門傳二十五ヶ條上

俳諧の道

或人問曰俳諧は何の爲に作るの事や
答曰俳諧を教ふは人々を又問俳諧
の道とするは何の事白佛氏に問ふ
俳は遊子ありて道の實有と雖も
身は遊子ありて道の實有と雖も
道は俳の道なり俳の道は遊子の道なり
遊子の道は俳の道なり

46

芭蕉門傳二十五ヶ條

二卷 写本 伝芭蕉著 延享四(一七四七)年蛙掌写
縦二七・〇×横一九・七cm
(請求記号 911.407.12-1 写本大文庫)

松尾芭蕉は江戸時代前期(元禄期)の俳人で、俳諧を新しい芸術として創り上げた。本書は、その芭蕉から門人への俳諧に関する教えが記されている。上巻十五條、下巻十條からなり、上巻では、俳諧の道、俳諧文字、変化の伝など、下巻では、趣向の実伝、恋の句についてなどが記されている。

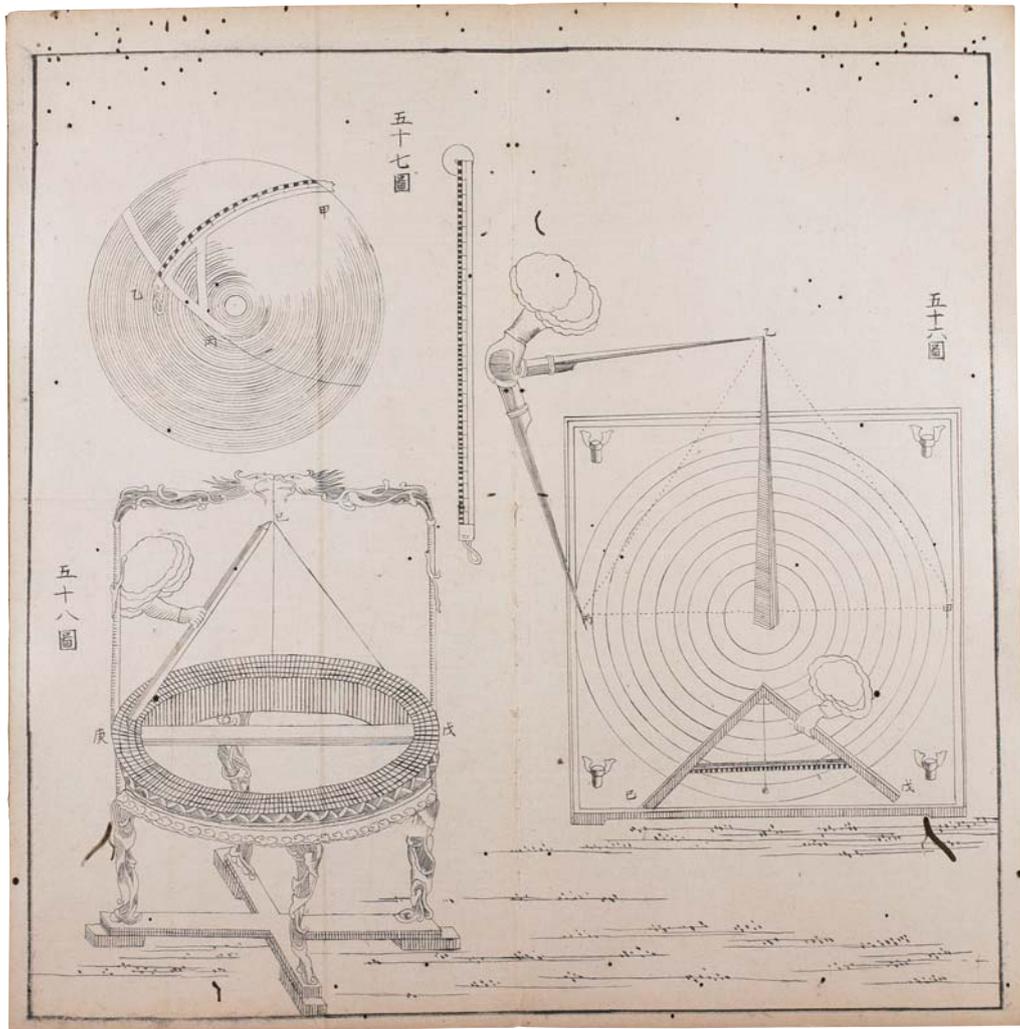


48 絵本百鬼

三巻 鳥山石燕画 安永五（一七七六）年刊 縦二一・五×横一五・七cm
 （請求記号 913.64.4W-3 写字台文庫）

別称を『絵本百鬼夜行』『百鬼夜行』ともいう。古くより、「百鬼夜行」といわれ、夜間、いろいろな妖怪が列をなして出て歩くという迷信があることに由来している。これらは江戸時代後期に大量に出版され、「百鬼夜行」といえば「妖怪の本」を表すほどであった。写字台文庫内にいわば妖怪図鑑ともいえるこのような書物が収められていることは大変興味深い。鳥山石燕（一七二二～一七八八）の描く本書は、上・中・下の三冊からなり、ろくろくび、やまびこ、河童、ひょうすべ等、現在でも耳にする妖怪が数多く記載されている。

掲載の頁には「ぬらりひよん」が描かれている。商人のような格好をしたぬらりひよんは、人々がせわしなくしている夕方、どこからともなくやってきては、勝手に家の中に入りこみ、座敷でお茶などを飲む。まるで自分の家であるかのように入ってくるため、人は気づかないことが多いという。ともかくとらえどころのないぬらりくらりとした妖怪である。



49

諸儀象図

二帖 百七十七図 フェルディナンド・フェルビースト撰
 江戸後期写 折本 縦三三・八×横一六・八cm
 (請求記号 G09.9W/2 写字台文庫)

フェルディナンド・フェルビースト (Verbiest, Ferdinand 中国名・南懷仁 一六二二〜一六八八) は、中国において康熙帝に天文学・数学を進講し、天文観測の諸器をつくり、北京観象台にて地理、地質、天文について論じた人物である。ベルギー生まれのイエズス会士でもあったため、西洋の知識を伝え、西洋暦採用の端緒をも開いた。

本書は天文に係する諸儀の図をまとめたもので、観象台図や黄道儀、赤道儀、天体儀、渾天儀などの図が全体で百七十七図ある。



50 平天儀

一冊 岩橋嘉孝(善兵衛)作 享和頃刊 縦二八・五×横一五・五cm
 (請求記号 643・3W・1 写字台文庫)

平天儀とは、星の位置を地図のように平面図上に記した星図のことである。享和(一八〇一〜一八〇四)の頃、大坂泉南の人、岩橋善兵衛(諱嘉孝、通称巖橋氏、号耕聊堂、一七五六〜一八一)が平天儀なる装置を製作したと伝わる。これは五層の薄板の円盤を中心で止めて互いに回転し得るようにしたもので、今日の星座早見盤に似ている。中央一番上の盤に地球が描かれ、次に月や太陽、黄道の描かれている盤、地球の二十八宿の描かれている盤などに分かれている。これで地球上の各地、月・太陽・潮汐の干満などの関係が分かるようになっていた。

写字台文庫本には、享和元(一八〇一)年の刊記がなく、説明記事が流布している『平天儀』に比べて簡略であることから、享和元年四月以前に刊行された版であるとされ、稀少である。(海野一隆「岩橋嘉孝の『平天儀』」『科学史研究』四五卷二三七号)



51

紹興校定經史証類 備急本草

二十八卷 二十四冊 (宋) 王繼先等校 江戸後期写
 縦二六・五×横一八・八cm
 (請求記号 021.6324 写字台文庫)

本書の成立・刊行・伝承には不詳な点が多々あるが、一般には次のように考えられている。

紹興二十七年(一一五七)年に王繼先が校上した『大観本草』が国子監から刊行され、ついで継先らは詔を奉じて同書を再校し、自注も加えて同二十九年(一一五九)年に『紹興校定經史証類備急本草』と名づけて進上した。

本書は日本に写字台文庫本二点を含め、計二十七点の所蔵が知られており、海外では大英図書館、台北故宫博物院図書文献館、北京図書館も各一点を所蔵する。すべて日本写本で、国外へは明治以降に伝えられた。

写字台文庫蔵の当本には六百十九葉が載り、うち五百十葉について計七百九十二の図がある。後人の手がかなり加えられ、錯簡や誤脱もあるが、絵はよく文も多く、内容が豊富な点では伝写本中の善本とされる。当本は岡西為人の解題を付し、昭和四十六(一九七二)年に東京・春陽堂より原寸大で影印出版されている。

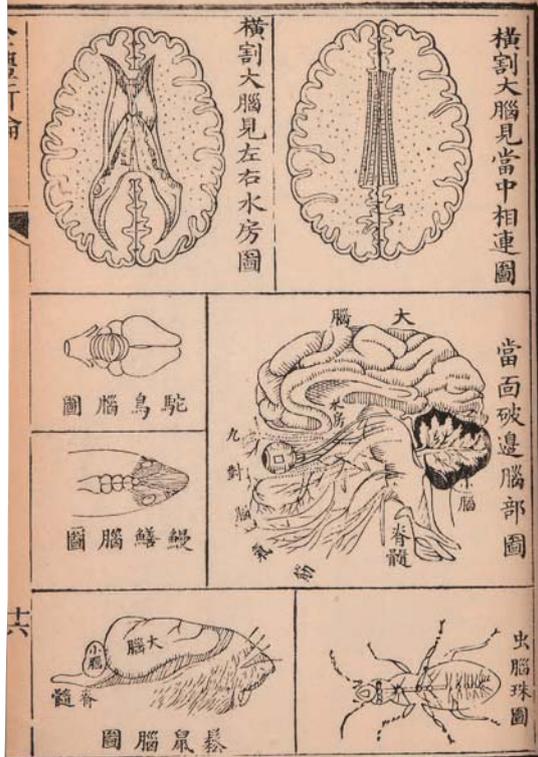


52

舎密開宗

七冊 ウィリアム・ヘンリー原著 宇田川榕菴訳 天保八（一八三七）年
 弘化四（一八四七）年刊 縦二五・八×横一八・〇cm 彩色図入
 （請求記号 630.10W7 写字台文庫）

日本最初の化学書。イギリスの化学者ウィリアム・ヘンリー（Henry, William 一七七五～一八三六）の著書『実験化学要義（Elements of Experimental Chemistry）』（一七七九年刊）をドイツ語訳し、さらにオランダ語訳として重訳したものを原本とし、幕末の蘭学者宇田川榕菴が、晩年の情熱を傾けて訳した名著とされる。訳とともに自らの注釈・実験の結果も記している。「舎密（せいみ）」はラテン語系オランダ語の Chemie（化学）の音訳であり、「開宗（かいそう）」は、「物の大元を啓発する」という意である。これまで日本における化学に関する知識は、薬剤を調整する必要から医者によって研究されていたが、本書によってはじめて科学のカテゴリーの一つとしての「化学」が樹立されるに至った。全七篇二十一巻、内篇十八巻六冊・外篇三巻一冊よりなる。片仮名交じりの本文、彩色刷の挿画多数入。初篇から六篇に内篇十八巻を、七篇に外箱三巻を収録。

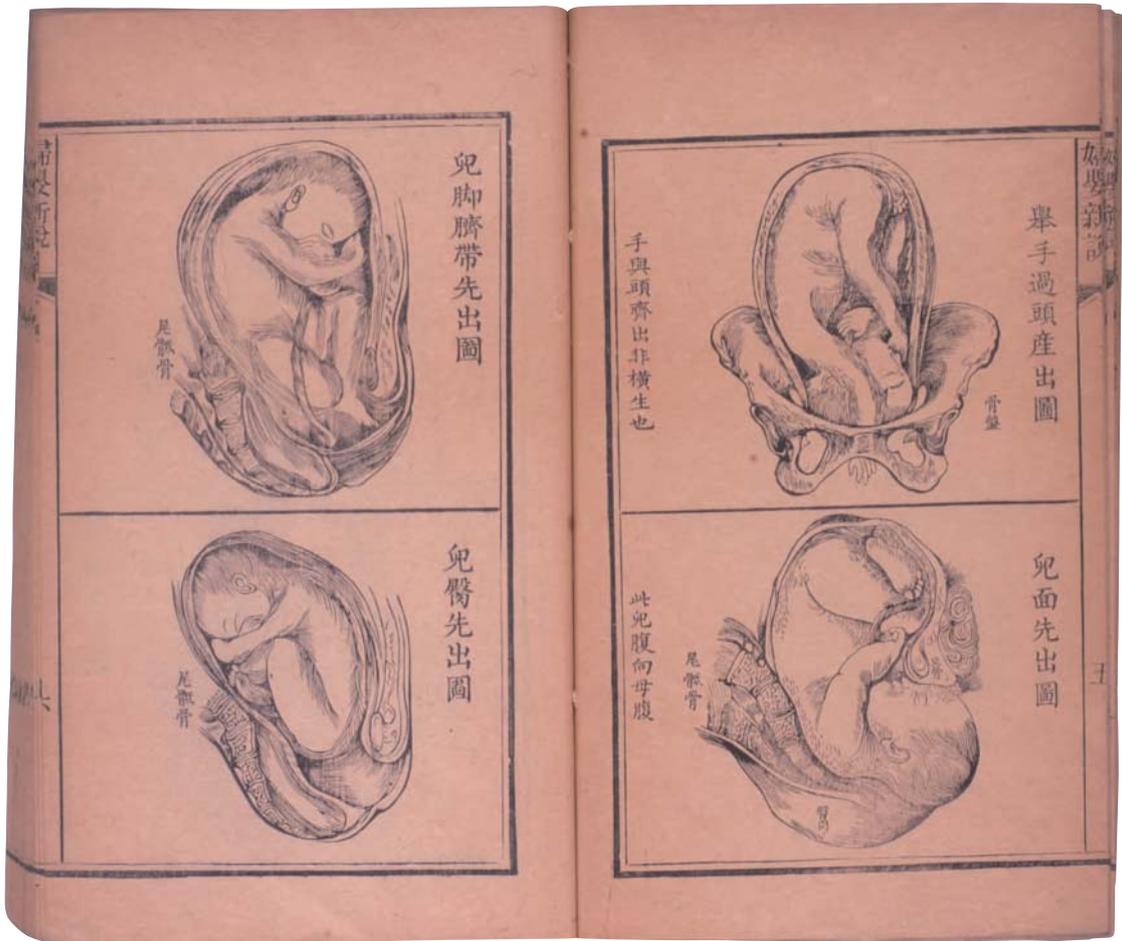


53 全体新論

一卷一冊 ホブソン(中国名 合信)撰 清咸豐元(一八五〇)年
 羊城惠愛医刊 上海墨海館藏版 縦一六・〇×横二五・六cm
 (請求記号 G909.1501 写字台文庫)

『全体新論』は、ロンドン伝道医療宣教師として中国に派遣されたホブソンによって咸豐元(一八五〇)年に広州で著され、同年上海で刊行されたものである。本書は、主に人体の構造を解剖学的に記述しており、人や一部の動物も含んだ骨格や人の神経・血管・臓器等のしくみから妊娠中の胎児の様子などを詳細な絵とともに説明している。

この『全体新論』は、『西医略論』・『内科新説』・『婦嬰新説』とともに中国医学の発展に大きく貢献した。また、『博物新論』を加えた五種の著書は、既に『解体新書』やその改訂書である『改訂解体新書』が刊行されていた幕末明治初期の日本にも輸入され、広く読まれるとともに、翻刻や註解を付けた版が多く刊行された。



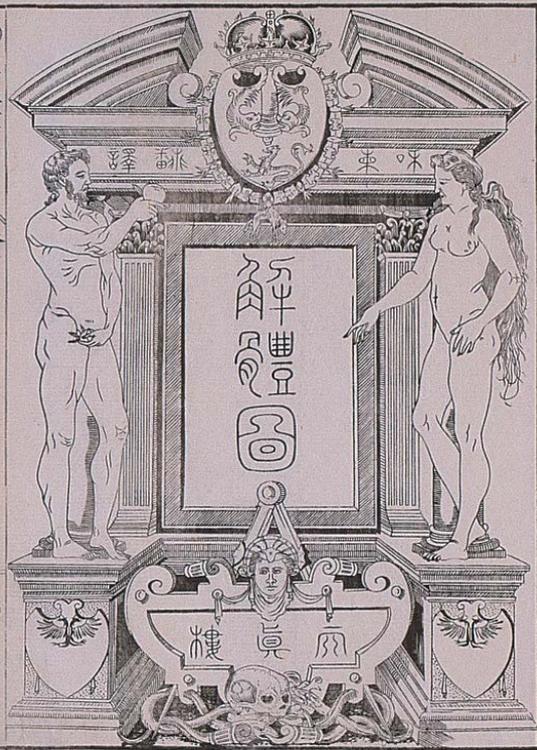
54

婦嬰新説

一卷一冊 ホブソン(中国名 合信)撰 清咸豐八(一八五八)年
 上海仁濟医館刊 縦一六・〇×横二五・六cm
 (請求記号 690.9-563.1 写字台文庫)

『婦嬰新説』は、咸豐八(一八五八)年に『全体新論』の著者ホブソンによって著され、同年上海で刊行されたものである。
 本書は『全体新論』を補うものであり、その内容は、主に妊婦の過程(月経・出産・産後等)に関する病気の症状や、それらに対しての薬の作り方・使用法について、乳児・幼児の成長に関する記述が詳細に説明されている。また若干ではあるが、胎児等の絵が掲載されている。

也。又或震然揭旗鼓。亦皆不知解體之法。徒屬孟浪。豈不閔乎。惜哉。世雖有豪傑士。汚習惑乎耳目。未能披雲霧而見青天也。故苟非改面目者。則不能入其室也。嗚呼。人有能有不能。余之不能。斷斷無它。技唯獨於斯業。專精得以明之。誠無慙乎古之人。而其所權輿。要在改面目也。如與余同志。從事于斯。則庶乎得而至也。雖然。余不憚乎文辭。故於斯書。姑達其意而已。讀者如有不解者。迨余之生質訪之可也。



55 解體新書

四卷序図一巻 五冊 杉田玄白・前野良沢・中川淳庵訳 小田野直武画
安永三(一七七四)年刊 縦二六・八×横一八・〇cm
(請求記号 600.63066 写子白文庫)

わが国最初の西洋解剖書の訳本である。原典は、ドイツ人ヨハン・アダム・クルムスの『解剖図譜』の独蘭訳『ターヘル・アナトミア』である。前野良沢(一七二三〜一八〇三)を主に、杉田玄白(一七三三〜一八一七)・中川淳庵(一七三九〜一七八六)らが桂川甫周(一七五四〜一八〇九)らの協力を得て翻訳にあたり、安永三(一七七四)年に刊行した。本文四巻、附図一巻からなる。本学図書館が所蔵しているのは、その初版本である。

明和八(一七七二)年三月四日、江戸小塚原における女体の腑分けの見学により、ターヘル・アナトミアの図の正確さに感銘を受け、その翌日から三年の歳月をかけて翻訳し、非常な努力をして完成した。内容は、原典の本文だけを訳し、本文の数倍に及ぶ脚註には触れず、二十八編に細分される。

図は、小田野直武(一七四九〜一七八〇)が模写したものであるが、裸体の男女が左右に立ち、上方に王冠と紋章を付した盾がある扉絵は、原書である『ターヘル・アナトミア』の扉絵とは異なっている。現在では、スペインの解剖学者ワルエタが著した解剖書の扉絵と構図がほぼ一致していることが指摘されている。

本書の翻訳・刊行は、一時代を画する偉業として医学史上高く評価され、以後日本医学の夜明けを築き上げた名医家たちが次々と本書に学び、医学の発達に偉大なる貢献をした貴重な資料である。



56

立華正道集 りっかしょうどうしゅう

二卷 尋旧子著 天和四（一六八四）年刊 縦二六・七×横一九・三cm
 【請求記号 793.52 写字台文庫】

仏前供花に起源を持つとされる立花は、生け花の最も古い様式である。本書出版の前年には、池坊専好の立花を系統的に理論づけた『立花大全』（十一屋太右衛門著）が刊行された。

本書は『立花大全』を要約し、一冊目は、序文・目録・立花の絵図、二冊目は絵図の続き・本文・奥書から構成されている。序文には、立花とはどういうものが記されており、絵図としては、立花の方法を图示したものが百四点描かれている。本文には、立花の決まりごとが簡条書きで四十八箇条記されており、更に、四箇条が補遺されている。

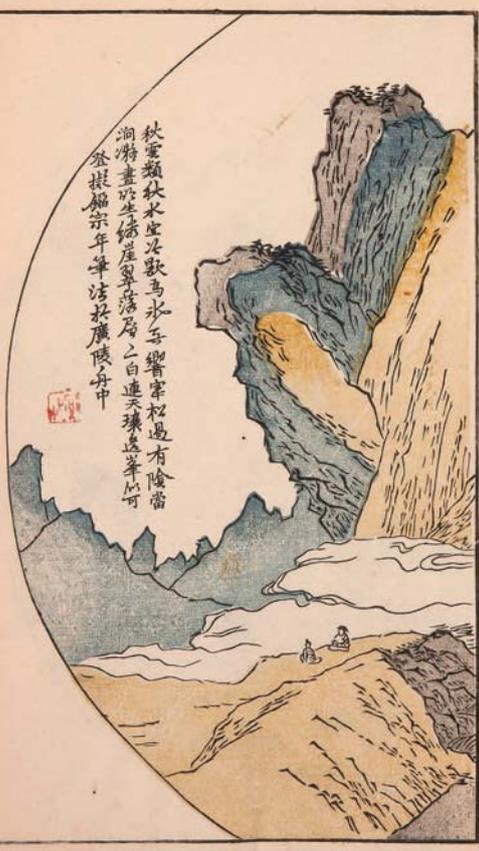
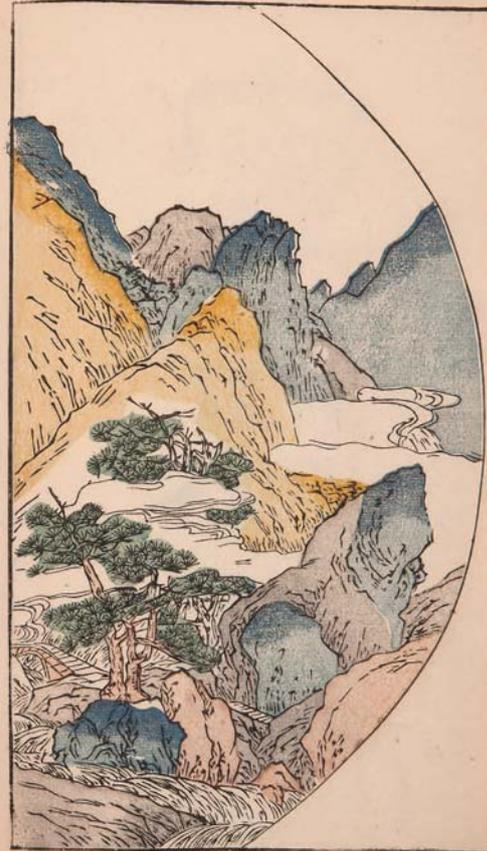


58

和漢名画苑

六冊 大岡春卜編 寛延三(一七五〇)年刊 縦二六・〇×横一八・〇cm
 (請求記号 T209-72W-6 写字台文庫)

和画・漢画の模写粉本を縮図によって編集した画本。大坂の画家・大岡春卜(一六八〇〜一七六三)によるもので、元文四(一七三九)年の自跋がある。大岡春卜は、若い頃江戸狩野派を学び、後に明画風の作風で法眼(法印に次ぐ僧侶の位)となる。当時流行した絵本類の挿絵画家として大坂で活躍した。巻二・土佐流之部に「おどり」と題された八人の男女の輪舞図があり、その表情や指先の表現は「相応寺屏風」の画風と類似している。



秋重類秋水空吹歌馬水吾響響松過有陰雷
洞游畫於生儲崖翠落居之自連天珠遠峯似可
孤提船宗年筆法於廣陵舟中

59 芥子園画伝

初集八卷五冊 (清) 王槩撰 江戸中期刊 縦二七・五×横一八・四cm
(請求記号 720.9-4W-5 写字台文庫)

清の王槩(字安節、一六四五〜一七一〇頃)が山水画の画法を詳述した書。「芥子園」とは金陵(南京)の画室の名。康熙十八(一六七九)年に第一集初版が刊刻された『芥子園画伝』は、早くも元禄年間(一六八八〜一七〇四)には日本に伝えられ、寛延元(一七四八)年以降たびたび翻刻された。

本学図書館所蔵本は刊行年こそ不明であるが、版元書誌から寛延(宝暦(一七四八〜一七六四)頃の初期の翻刻本の一つと思われる。刷りや色合いの良好さは、康熙初版本を十分しのばせるに足る作品である。



60

ほくさいまんが
北斎漫画

四冊 葛飾戴斗(北斎)編 文化十二(一八五二)年刊

縦三三・〇×横一六・一cm

(請求記号: 720.9・68W・4 写真/古文庫)

浮世絵師として著名な葛飾北斎(一七六〇〜一八四九)は、自ら画狂人と称するほど終生描くことに情熱を燃やし続け、九十年に及ぶ人生を画業一筋に歩んだ偉大な人物である。その彼が、一般庶民の画技習得のために編んだ絵手本が『北斎漫画』で、庶民の信仰に関わるものから、日常生活具、動物、植物など多種にわたる絵が収められている。特に、働いている人の姿や、相撲を取っている人の姿など、人間の姿を描いた画は、手足の筋肉の動きなどが実に躍動的でありリアルに描かれている。



61 勝如上人旧蔵切手コレクション

第二十三代宗主勝如上人（一九一〇〜二〇〇二）は、趣味として、幼少の頃から切手収集を始め、遷化される直前まで続けていた。個人の切手コレクションとしては質量ともに優れたものである。日本をはじめとする約二百七十の国々と地域に及び、六十六冊分のファイルに収集されていた。特に宗教に関係する切手が数多く収集されている点に特色があり、仏教に限らず、キリスト教、イスラム教、その他民間信仰などに至るまで収集がなされている。

また、勝如上人は、切手文化会の会員でもあり、日本切手の印刷機の区分や、宗教切手の内容に関する研究もしていた。収集された切手は、平成十四（二〇〇二）年二月に本学に寄贈され、今年の三月まで、約十二年に及ぶ調査・整理作業が行われてきた。今回、勝如上人の十三回忌にあたり、ごく一部の切手のみではあるが、歴代宗主の幅広い向学の一つとして展示した。

二〇一四年度展観あとがき

この度、龍谷大学大宮図書館と本派本願寺龍谷教学会議の共催で、特別展観「本願寺宗主の向学―写字台文庫を中心として―」を開催いたしました。

本展観の開催にあたっては、本学で開催される龍谷教学会議五十回記念大会及び第二十五代宗主専如上人の継職を慶祝する意味も込めて、龍谷大学大宮図書館が所蔵する歴代本願寺宗主の蔵書「写字台文庫」を中心に展示を行いました。

今回の展示は、特に貴重な教典である「歴代宗主ゆかりの至宝」、歴代宗主の学問・教養の関心を取り上げた「歴代宗主の向学」、真宗・仏教以外の分野の典籍を扱った「本願寺宗主と諸典籍」の三つの柱で構成しました。

展示をご覧いただくことで、歴代宗主が真宗・仏教の深い知識に加え、文学・医学・華道・書画などといった広く深い向学や教養を持って法統を継承されてきたことが、お分かりいただけるのではないかと思います。

なお、本特別展観を開催するにあたりまして、ご協力くださいました関係者の皆さまに感謝申し上げます。

龍谷大学大宮図書館

龍谷教学会議

展示解説

「写字台文庫について」 龍谷教学会議幹事 野呂靖（龍谷大学講師）

「歴代宗主ゆかりの至宝」 同幹事 三浦真証（本願寺派宗学院研究員）

「歴代宗主の向学」 同幹事 三浦真証（本願寺派宗学院研究員）

「本願寺宗主と諸典籍」 龍谷大学大宮図書館

協力 三栗章夫（浄土真宗本願寺派総合研究所上級研究員）

岩谷教授（龍谷大学非常勤講師）

龍谷大学大宮図書館二〇一四年度特別展観
（龍谷教学会議第五十回記念大会開催記念）

本願寺宗主の向学 ―写字台文庫を中心にして―

開催期間…二〇一四（平成二十六）年十月二日（木）～十月十日（金）

二〇一四（平成二十六）年十月

編 集… 龍谷大学大宮図書館
龍谷教学会議

発 行… 龍谷大学大宮図書館
〒六〇〇八六六 京都市下京区七条通大宮東入大工町一二五―一
電話（〇七五三四三三三三）（代表）

龍谷教学会議

〒六〇〇八五二 京都市下京区堀川通花屋町下ル

浄土真宗本願寺派宗務所勸学寮内
電話（〇七五三七一一五一八）（代表）

解題執筆… 龍谷大学大宮図書館

龍谷教学会議

印 刷… 株式会社 双林印刷社

写真撮影… 川見 善孝

著作権等は、龍谷大学に帰属します



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY